

二重堀遺跡

新林遺跡

－千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書－



平成 18 年度

日立造船不動産株式会社

八千代市二重堀遺跡調査会

八千代市新林遺跡調査会

例 言

- 1 本書は、日立造船不動産株式会社を事業主体とする共同住宅建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、
千葉県八千代市上高野字新林1208-2ほかに所在する二重堀遺跡（遺跡No 八千代市231）
開発面積 8,705.13㎡ 調査対象面積 6,300㎡
千葉県八千代市上高野1196-1ほかに所在する新林遺跡（遺跡No 八千代市233）
開発面積 5,665.77㎡ 調査対象面積 5,665.77㎡
である。
- 3 発掘調査の業務は、日立造船不動産株式会社の委託を受け、八千代市二重堀遺跡調査会及び八千代市新林遺跡調査会が実施したものである。
- 4 発掘調査及び整理作業は、下記の期間に実施した。
二重堀遺跡
確認調査 平成4年12月7日～平成4年12月25日
本調査 平成5年4月23日～平成5年9月17日
新林遺跡
確認本調査 平成6年4月6日～平成6年5月9日
整理作業は発掘調査がそれぞれ別の事業であったが、事業主体が同一であったため、事業者と合意の上、八千代市遺跡調査会が両遺跡の整理事業をまとめて受託し実施した。
基本整理作業 平成6年5月11日～平成6年5月31日
本整理作業 平成18年7月24日～平成19年3月31日
- 5 本書の執筆は第1章・第3章第1節を秋山利光、第2章・第4章を大淵淳志、第3章第2節から第5節・第V章を小川和博が執筆し、編集は小川和博、大淵淳志が行った。
- 6 本書の整理作業は、実測・トレース等を小川和博、大淵由紀子、写真撮影を小川和博、大淵淳志が行った。
- 7 本遺跡の発掘調査に伴う出土品及び図面、写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
Fig1 大日本帝国陸地測量部 明治38年測量
Fig2 八千代都市計画図（1：10,000）
Fig3 八千代都市計画図（1：2,500）
をそれぞれ、加筆・修正して使用している。
- 9 発掘調査から本書の刊行に至るまで、以下の諸機関・諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝するしだいである。（敬称略）
千葉県教育庁教育振興部文化財課、財団法人千葉県教育振興財団、長谷工コーポレーション
上高野原連合自治会

目 次

例言

目次

挿図目次

写真図版目次

I. 調査に至るまでの経緯	1
第1節 二重堀遺跡	
第2節 新林遺跡	
II. 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
III. 二重堀遺跡	7
第1節 調査の経緯と概要	7
第2節 遺跡の概要	7
第3節 旧石器時代の調査	7
第4節 縄文時代の調査	14
1. 概要	14
2. 遺構と遺物	14
1) 竪穴状遺構	14
2) 土坑	17
3) 遺構外の出土遺物	36
IV. 新林遺跡	59
第1節 調査の経緯と概要	59
第2節 遺跡の概要	59
第3節 遺構（近世以降）	59
V. まとめ	68
第1節 二重堀遺跡	68
第2節 新林遺跡	69

挿 図 目 次

- Fig. 1 周辺の地形
Fig. 2 遺跡の位置と周辺の遺跡
Fig. 3 二重堀遺跡、新林遺跡本調査区

二重堀遺跡

- Fig. 4 遺構配置図
Fig. 5 土層断面図
Fig. 6 旧石器時代確認グリッドおよび土層断面図
Fig. 7 旧石器時代石器出土分布図・石器実測図（ユニット2・3）
Fig. 8 旧石器時代の石器
Fig. 9 竪穴状遺構SX01実測図
Fig. 10 竪穴状遺構SX01出土土器分布図
Fig. 11 竪穴状遺構SX01出土土器
Fig. 12 土坑SK09・10・15・17・18・19・20平面図
Fig. 13 土坑SK21・22・23・24・25平面図
Fig. 14 土坑SK27・28・29・30・31平面図
Fig. 15 土坑SK32・35・36・37・38平面図
Fig. 16 土坑SK39・40・41・42・43平面図
Fig. 17 土坑SK45・46・47平面図
Fig. 18 土坑SK48・49・51・53・54平面図
Fig. 19 土坑SK09・19・20・39遺物及び遺物分布図
Fig. 20 土坑SK22・27・30・45遺物及び遺物分布図
Fig. 21 土坑SK46・51遺物及び遺物分布図
Fig. 22 土坑SK24・40・47出土遺物
Fig. 23 縄文早期・前期中葉の土器
Fig. 24 縄文早期・前期中葉出土土器分布図
Fig. 25 縄文前期中葉の土器
Fig. 26 縄文前期後葉の土器（1）
Fig. 27 縄文前期後葉の土器（2）
Fig. 28 縄文前期後葉の土器（3）
Fig. 29 縄文前期後葉の土器（4）
Fig. 30 縄文前期後葉の土器（5）
Fig. 31 縄文前期後葉出土土器分布図
Fig. 32 縄文前期後葉出土土器分布図

- Fig.33 縄文前期後葉の土器（6）
Fig.34 縄文前期後葉の土器（7）
Fig.35 縄文前期後葉の土器（8）
Fig.36 縄文前期後葉の土器（9）
Fig.37 縄文前期の土器
Fig.38 縄文前期後葉出土土器分布図
Fig.39 縄文前期後葉出土土器分布図
Fig.40 縄文中期・後期・晩期の土器
Fig.41 縄文中～晩期出土土器分布図
Fig.42 縄文時代の石器

新林遺跡

- Fig.43 新林遺跡遺構配置図
Fig.44 陥し穴状遺構 SK01・SK06
Fig.45 陥し穴状遺構 SK07・SK08
Fig.46 陥し穴状遺構 SK09・SK10
Fig.47 陥し穴状遺構 SK11・SK12
Fig.48 溝状遺構SD01

写真図版目次

二重堀遺跡

- PL. 1 二重堀遺跡周辺航空写真
- PL. 2 二重堀遺跡確認調査近景
- PL. 3 旧石器時代確認グリッド（F V - 9 区 西壁）、旧石器時代確認グリッド（F IV - 3 区 北壁）
- PL. 4 調査区上層断面（D IV - 11 ~ F VII - 3 区）、竪穴状遺構（SX01）平面図
- PL. 5 土坑SK09・10・17・19・20・21・22・23
- PL. 6 土坑SK24・25・27・28・29・30・31・32
- PL. 7 土坑SK35・36・37・38・39・40・41・43
- PL. 8 土坑SK45・46・47・48・49・51・53・54
- PL. 9 旧石器時代の石器、縄文時代竪穴状遺構（SX01）出土土器、縄文早期の土器
- PL. 10 縄文前期中葉の土器、縄文前期後葉の土器
- PL. 11 縄文前期後葉の土器
- PL. 12 縄文前期後葉の土器
- PL. 13 縄文中期前半の土器、縄文後期中葉・晩期後半の土器、縄文時代の石器

新林遺跡

- PL. 14 新林遺跡近景、陥し穴状遺構SK01
- PL. 15 陥し穴状遺構SK06、陥し穴状遺構SK07
- PL. 16 陥し穴状遺構SK10、陥し穴状遺構SK12

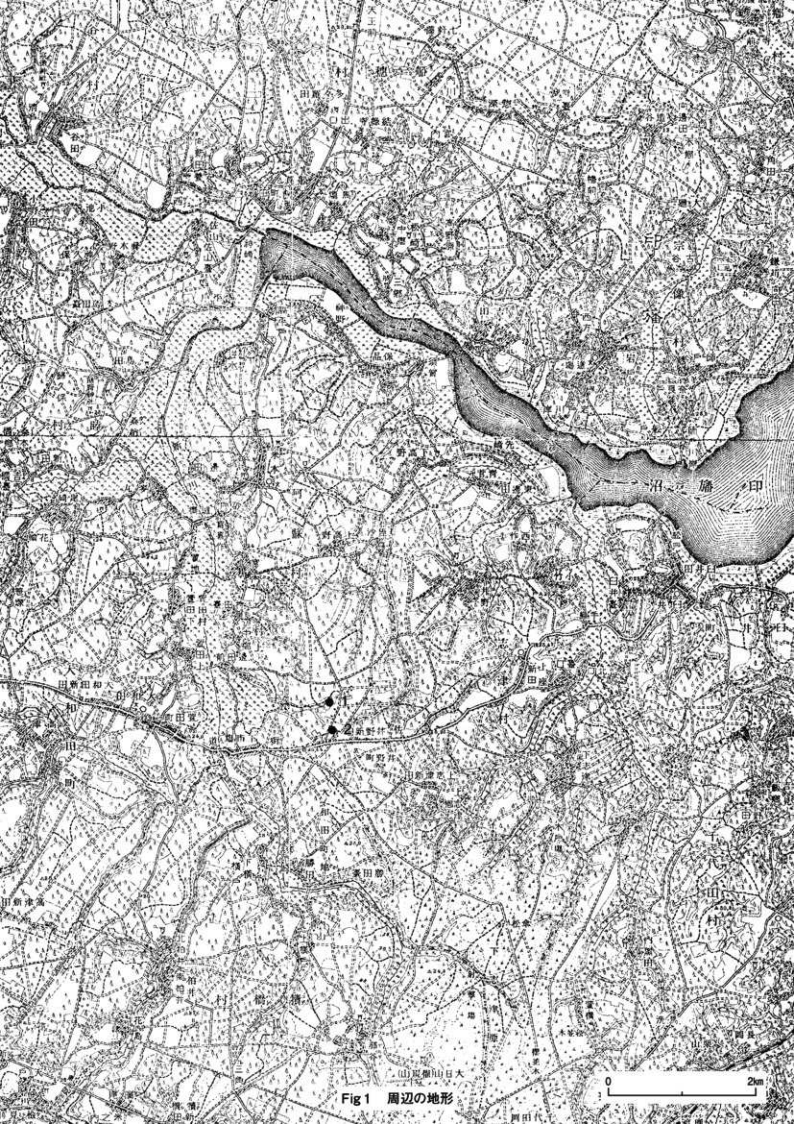
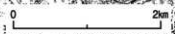


Fig 1 周辺の地形



山 大 日 大 山 大 日 大

阿 田 代

I 調査に至るまでの経緯

第1節 二重堀遺跡

二重堀遺跡は平成4年4月3日付けで、日立造船不動産株式会社から八千代市上高野字新林1208-2他の8,705.13m²について、共同住宅新築工事のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は山林と畑地であり、縄文土器が散布していた。また、照会地は周知の遺跡の範囲内でもあり、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。そのため、県教育委員会にその旨の意見を付して同年4月10日付けで報告した。同年5月6日付けで照会地の一部である6,300m²の範囲に縄文時代等遺物包蔵地が所在するとの県教育委員会の回答があり、その旨を同年5月13日付けで照会者に報告した。

事業者から文化財保護法（以下、「法」という。）第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出され、平成4年6月4日付けで県教育委員会に報告した。事業者と地元自治会との間で工事に関する協議がまとまった平成4年12月7日、市教育委員会は遺跡の性格と遺構の件数を把握するため確認調査を開始した。

（秋山 利光）

第2節 新林遺跡

新林遺跡は昭和4年6月18日付けで、日立造船不動産株式会社から八千代市上高野1196-1他の5,665.77m²について共同住宅新築工事のための「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を行ったところ、現況は畑地であり、土師器が散布していた。県教育委員会にその旨の意見を付して報告したところ、照会の回答のためには試掘調査が必要と判断された。事業者と地元自治会との間で工事に関する協議のため、平成5年1月11日試掘調査を実施した。照会地5,665.77m²に対して1%の調査面積を目指して、2m四方のグリッドを16ヶ所 約64m²掘削した。その結果、土師器の散布はあまりみられなかったが、ひとつのグリッドから遺構を検出した。同日県教育委員会にその旨報告した。同年1月25日付けで当照会地について全域奈良平安時代の遺物包蔵地が所在するとの県の回答があり、照会者に通知した。

平成6年3月25日付けで事業者から、法第57条の2第1項の規定による土木工事のための発掘届が提出された。事業者と八千代市教育委員会が協議し、確認本調査により記録保存することで合意された。事業者から委託を受けた八千代市新林遺跡調査会は調査員を(有)日本考古学研究所に調査員の派遣を依頼し、同年3月4日、法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を八千代市教育委員会に提出した。

調査の準備の整った同年4月6日確認本調査を開始した。

（秋山 利光）

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

二重堀遺跡は、千葉県八千代市上高野新林1208-2に所在し、京成電鉄「勝田台」駅から北東へ約800mの所にある。また、新林遺跡は千葉県八千代市上高野字稲荷前1181-1に所在し、同「勝田台」駅より北約700mの地点で、両遺跡間の距離は約300mである。

両調査地点は、千葉県北部に広がる下総台地の上位面に属し標高30m弱の台地上の平地に立地しており、北東には印旛沼が広がり、西側は南北に新川が流れている。印旛沼はかつては海につながる深い入り江であったが、海退や地殻変動等により海から切り離され現在は沼になっている。また新川は、上流で神崎川と合流し、印旛沼につながる。新川下流は八千代市から千葉市を抜けて東京湾へ注いでおり、この新川および、神崎川沿いの低地は現在、水田として利用されている。

次に、Fig. 2、Fig. 3に示した周辺の遺跡を抜粋して簡単に説明する。

1 二重堀遺跡（本調査地点）

縄文時代後期、奈良・平安時代の遺物の包含地。今回の調査では、旧石器時代から縄文時代後期までの遺物が出土した。遺構は縄文時代前期であった。

2 新林遺跡（本調査地点）

縄文時代前期・後期、奈良・平安時代の遺物包含地であった。今回の調査では遺物は出土しなかった。また、検出した遺構もすべて近世のものと思われる。

3 稲荷前遺跡

遺物の包含地。時代は縄文時代中期・後期、奈良・平安時代。

4 細田台遺跡

奈良・平安時代の遺物の包含地。土師器が発見されている。

5 黒沢台遺跡

縄文時代前期の包含地である。

6 大野遺跡

遺物包含地。縄文時代後期。

7 上谷津台遺跡

同じく、縄文時代後期の遺物包含地。

8 上谷津台南遺跡

縄文時代後期、奈良・平安時代の遺物。縄文土器、土師器が発見されている。

9 野路作遺跡

土師器が発見されている遺物包含地で、奈良・平安時代のもの。

10 名主山遺跡

弥生時代、奈良・平安時代の集落跡。1971年に調査しており、住居跡、掘立柱建物跡、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

11 根上神社古墳

前方後円墳1基。市指定の文化財である。

12 村上第1塚群

古墳時代、中近世の円墳、塚がある。一部消滅している。

(大淵 淳志)



Fig. 2 遺跡の位置と周辺の遺跡



Fig. 3 二重堀遺跡、新林遺跡本調査区

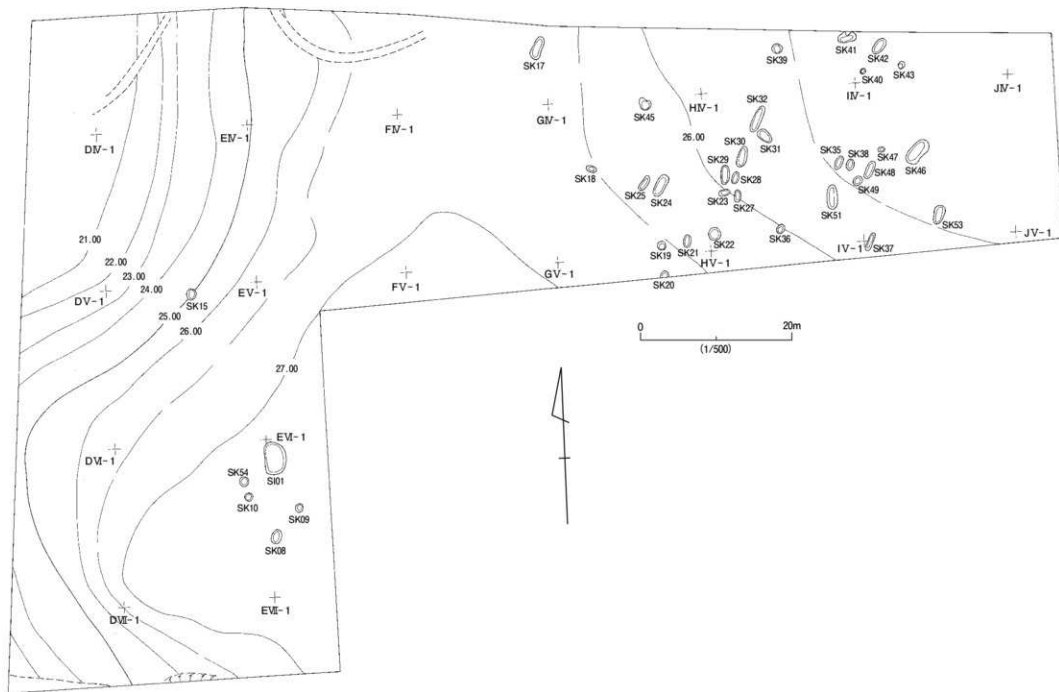


Fig. 4 遺構配置図

Ⅲ 二重堀遺跡

第1節 調査の経緯と概要

二重堀遺跡の調査は確認調査が平成4年12月7日に開始され、同年12月25日に終了した。6,300㎡の調査区域に対して、546㎡のトレンチを掘削し、縄文時代早期から後期の包含層と、土師器の散布を検出した。この確認調査の成果から、県教育委員会は6,300㎡の確認調査対象区域から5,300㎡の範囲で本調査が必要であると判断した。

これを受け、事業者と八千代市教育委員会が協議し、発掘調査による記録保存をすることで合意された。事業者から委託を受けた八千代市二重堀遺跡調査会は法第57条第1項の規定による埋蔵文化財発掘届を市教育委員会に平成5年4月1日提出し、準備の整った同年4月23日本調査を開始した。二重堀遺跡の本調査は平成5年4月23日から同年9月17日まで実施された。

(秋山 利光)

第2節 遺跡の概要

二重堀遺跡は、八千代市南東部、上高野字新林1208-2ほかに所在する。付近は新川と小竹川に挟まれた比較的平坦面広がる台地を形成しており、遺跡は新川に至る谷津の最奥部、台地のほぼ中央部の西側に位置し、標高は25～27mである。

こうした広大な台地に展開している二重堀遺跡は東西150m南北100mの楕円形に広がり、旧石器時代から縄文時代、中近世の複合遺跡であるが、今回の調査区は、遺跡の南西側6,300㎡が範囲で、旧石器時代と縄文時代前期の堅穴状遺構1基のほか、土坑35基を検出できた。

第3節 旧石器時代の調査

1. 概要

本調査区の東側、台地平坦面に旧石器時代確認のために、基本的に20mの方眼大グリッド内に2m×2mの下層確認グリッドを18ヶ所設定した。さらにほぼ中央のGⅣ確認グリッドでは南北および北端では東西に延びる、逆T字状トレンチ方を採用し、また同じGⅣ区北東隅ではL字状の拡張グリッドを設けた。その結果、2グリッドにおいて、遺物の出土があった。しかし、石器集中地点(ユニット)として取り上げたものの、いずれもわずか数点の剥片の出土であり、明瞭なユニットとしては確認できなかった。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序の資料とした土層断面は、石器が出土した石器集中地点(ユニット)を中心とした3グリッドを提示した。まず北西側のFⅣ-11グリッド北面、南西側のGⅤ-1グリッド北面、南東側HⅣ-1グリッド北面である。ここでは表土層を除去した以下の立川ロームを中心とした層序について触れたい。

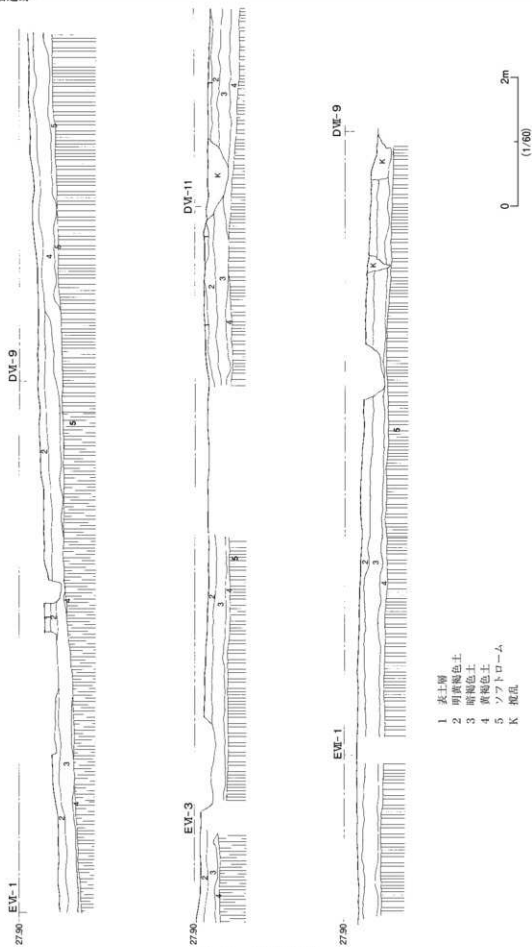


Fig. 5 土層断面図

- Ⅲ層 ソフトローム層、黄褐色を呈する軟質ロームである。GV-1グリッドでは下部が文化層となり、剥片など石器が出土した。
- Ⅳ層 明褐色を呈する硬質ロームである。締りがあり、堅緻である。
- V層 黄褐色を呈する硬質ロームで、Ⅳ層と比較するとやや暗い色を呈し、第1黒色帯に相当するものと思われる。
- Ⅵ層 明黄褐色を呈する硬質ロームである。始良丹沢バミス(AT)を含む。
- Ⅶ層 黄褐色を呈する硬質ロームである。締りがあり、堅緻である。
- Ⅷa層 暗褐色を呈する硬質ロームである。黒色スコリアをやや多く含む。第2黒色帯上部に相当する。
- Ⅷb層 にぶい黄褐色を呈する硬質ロームである。褐色のロームブロックを含む。上下層よりもやや明るく、締りがある。
- Ⅷc層 暗褐色を呈する硬質ロームである。上層2枚のなかで最も暗い色を呈し、第2黒色帯下部に相当する。
- X層 黄褐色を呈する硬質ロームである。締りがあり、堅緻である。
- XI層 褐色を呈する。武蔵野ローム層最上部に相当するものと推定される。

3. 検出した遺構と遺物

今回検出した2ヶ所の地点で石器が出土したとはいえ、GV-1グリッドで3点、HV-1グリッドで4点の剥片の出土であった。これらが石器集中地点(ユニット)と呼称すべきか問題である。

(1)GV-1グリッド出土(Fig. 7-1)

調査区南西側に位置する。出土層位はⅢ層下部で、2mグリッド内のほぼ中央、南北に一列に1点の剥片と2点の砕片が出土した。

1は安山岩製の横長の剥片である。打面は欠損している。長さ1.65cm、幅2.53cm、厚さ0.43cm、重さ1.48gを測る。

(2)HV-1グリッド出土(Fig. 7-1~4)

調査区南東側に位置する。出土層位はⅢ層下部で、2mグリッド内の南西側、1mの範囲に4点の剥片が出土した。1はチャート製の縦長剥片である。打面、打点は欠損している。長さ5.30cm、幅2.41cm、厚さ0.65cm、重さ6.56gを測る。2はチャート製の縦長の剥片で、打面側からの細かな剥離痕がみられる。長さ3.93cm、幅3.23cm、厚さ0.61cm、重さ6.26gを測る。3は鉄石英製の縦長剥片。礫原面を一部残している。長さ3.18cm、幅2.41cm、厚さ0.96cm、重さ6.22gを測る。4は安山岩製の剥離面打面を残す横長の剥片である。長さ3.61cm、幅4.63cm、厚さ0.65cm、重さ8.34gを測る。

(3)ユニット外出土石器(Fig. 8-1~9)

グリッド内でもⅢ層より上層、すなわちローム層外もしくは遺構内、表採資料を一括する。

1はチャート製の槍先形尖頭器である。表裏両面に調整加工が施された中型の優品である。最大幅が基部寄りに位置し、最大肥厚部と一致する。また図右側縁部に対し、左側縁部の調整剥離が粗く、結果左側縁が大きく湾曲する。長さ7.07cm、最大幅3.60cm、最大厚1.28cm、重さ34.28gを測る。表採資料である。

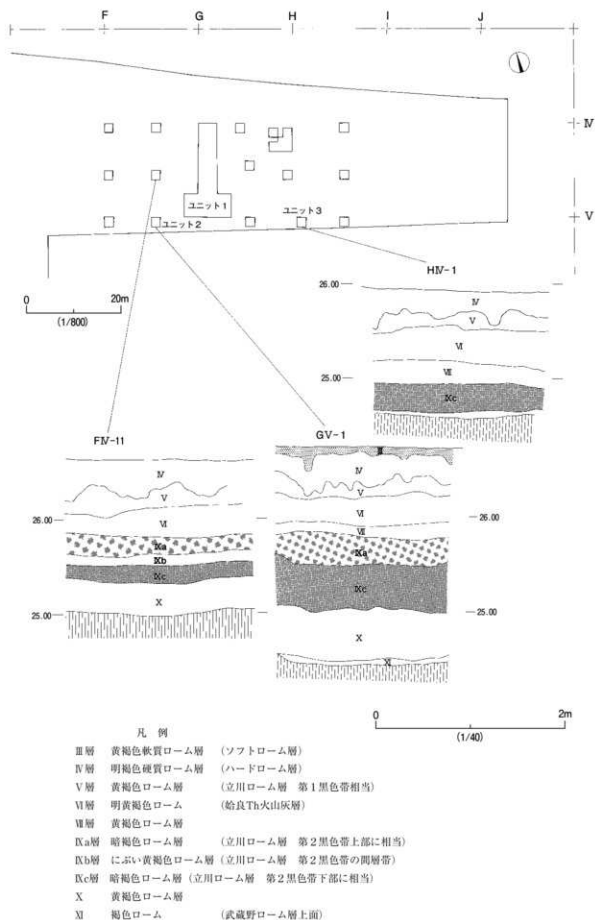


Fig. 6 旧石器時代確認グリッドおよび土層断面図

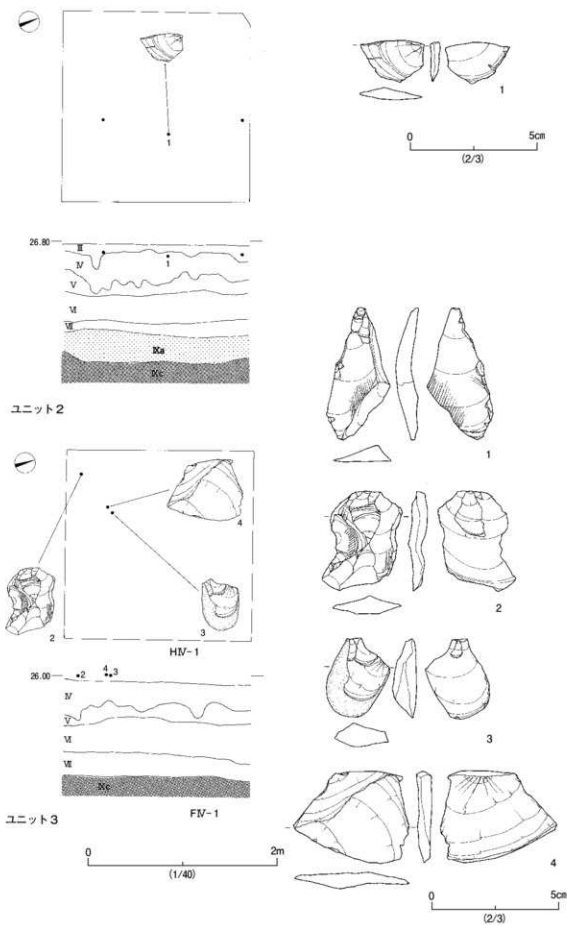


Fig. 7 旧石器時代石器出土分布図・石器実測図(ユニット2・3)

2～5は黒曜石製の剥片である。2・3は縦長破片。4・5は横長剥片である。6は頁岩製の縦長剥片。打面を残す。7～9は安山岩製の剥片。7・8は縦長剥片で礫原面を残す。9は横長剥片である。

Tab. 1 二重堀遺跡出土旧石器時代石器属性

図番号	出土地点	器種	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
Fig.7-1	GV-1-1	剥片	安山岩	1.65	2.53	0.43	1.48	ユニット2
Fig.7-1	GV-2	剥片	チャート	5.30	2.41	0.65	6.56	ユニット3
Fig.7-2	HV-1-2	剥片	チャート	3.93	3.23	0.61	6.26	ユニット3
Fig.7-3	HV-1-3	剥片	鉄石英	3.18	2.41	0.96	6.22	ユニット3
Fig.7-4	HV-1-1	剥片	安山岩	3.61	4.63	0.65	8.34	ユニット3
Fig.8-1	表採	尖頭器	チャート	7.07	3.60	1.28	34.28	
Fig.8-2	FV-7	剥片	黒曜石	4.45	3.15	1.12	12.92	
Fig.8-3	表採	剥片	黒曜石	3.15	2.54	0.90	5.68	
Fig.8-4	表採	剥片	黒曜石	4.04	4.81	1.34	19.20	
Fig.8-5	GV-6	剥片	黒曜石	2.23	2.35	0.62	1.72	
Fig.8-6	EV-7	剥片	頁岩	3.25	2.64	1.17	8.48	
Fig.8-7	FⅢ-11	剥片	安山岩	3.86	2.51	1.81	14.20	
Fig.8-8	FV-13	剥片	安山岩	4.58	3.90	1.39	20.00	
Fig.8-9	表採	剥片	安山岩	3.70	5.27	1.28	22.88	

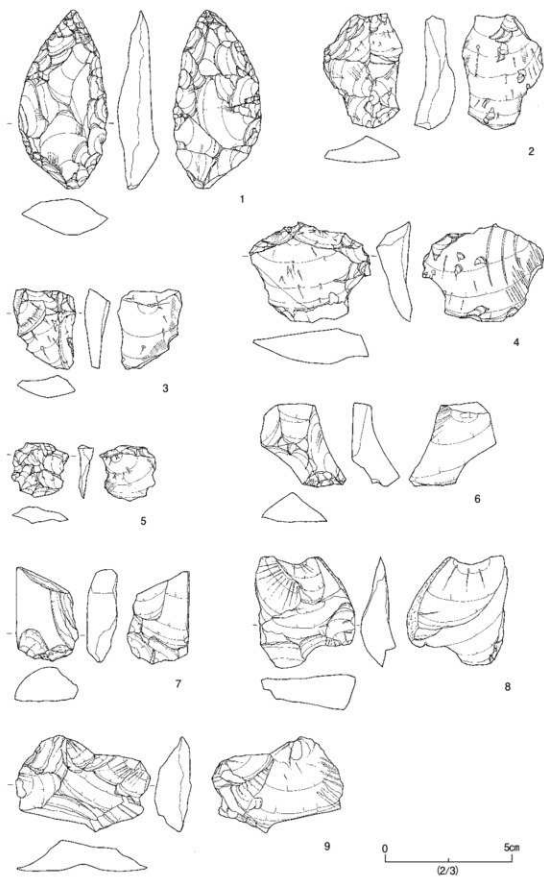


Fig. 8 旧石器時代の石器

第4節 縄文時代の調査

1. 概要

縄文時代の遺構は、前期の竪穴状遺構1基とやはり前期の土坑が検出された。また遺物として縄文時代早期前半、早期中葉、前期前半、前期後半、中期中葉、中期後半、後期中葉、晩期前半、晩期後半の土器のほか、石製品としてヘラ状石器、石鏃、剥片が出土した。

2. 遺構と遺物

1) 竪穴状遺構

(1) 竪穴状遺構SX01 (Fig. 9~11)

調査区の南西側DV-13, EV-1に位置する。立地する標高は27.53~27.73mを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方位はN-10°-Eを指す。規模は南北軸3.92m、東西軸2.63mで、深さは10~30cmを測る。底面はほぼ平坦で貼床は確認できず直床である。また踏み固めた硬化面も確認できなかった。壁面は外傾して立ち上がる。西壁に接して楕円形ピットが検出された。規模は長軸64.0cm、短軸56.0cm、深さ24.0cmを測る。

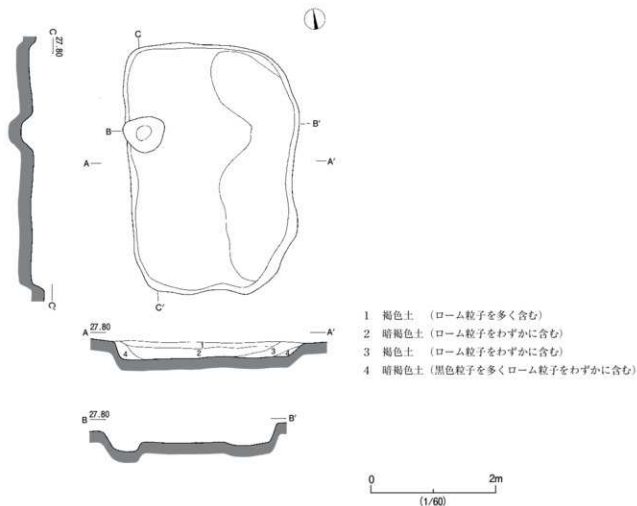


Fig. 9 竪穴状遺構SX01実測図

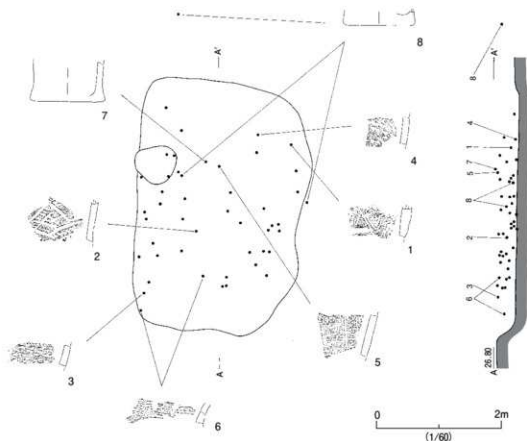


Fig. 10 竪穴状遺構SX01出土土器分布図

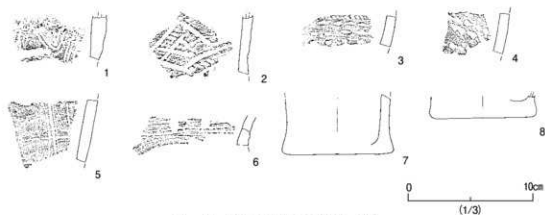


Fig. 11 竪穴状遺構SX01出土土器

覆土は4層に分層可能である。覆土上層である1層褐色土はローム粒子を多く含み、中層から床面を覆っている2層暗褐色土はローム粒子をわずかに含む。壁際に堆積している4層暗褐色土は黒色粒子を多く含む。

1層褐色土（10Y R 4/4）ローム粒子を多く含む。

2層暗褐色土（10Y R 3/3）ローム粒子をわずかに含む。

3層褐色土（10Y R 4/6）ローム粒子をわずかに含む。

4層暗褐色土（10Y R 4/3）黒色粒子を多く、ローム粒子をわずかに含む。

遺物は縄文時代前期中葉から後葉にかけてのもので、縄文土器のみ45点出土している。いずれも小破片

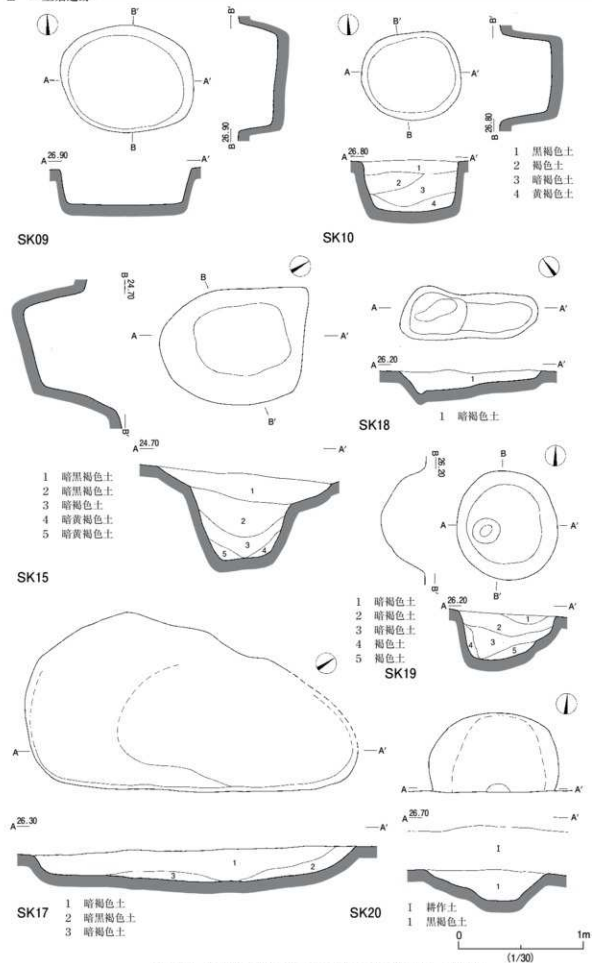


Fig. 12 土坑 S K 09 · 10 · 15 · 17 · 18 · 19 · 20 平面図

で、図示できたのは7点のみである。Fig.11-1は櫛歯状工具による波状文が施文される。2は付加条縄文が施文されたもので、胎土に多量の繊維を含む。黒浜式土器である。3は変形爪形文に横位の刺突列文が施文される。4は三角文、5は縦位および横位の平行沈線文が施文される。これらは浮島式土器である。6は集合沈線文が施文される諸磯式土器である。7・8は深鉢の底部破片である。なお、全体的には浮島Ⅱ～Ⅲ式期の遺物が多いことから、本跡はこの段階に比定できよう。

2) 土坑

(1) 土坑SK09 (Fig.12・19)

調査区の南西側EⅤ-2に位置し、立地する標高は26.83～26.84mを測る。平面形は確認面で長軸1.05m、短軸0.86mを測り、東西にやや長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大29.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部がわずかに高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は縄文土器が2点出土した。Fig.19-1は前期後半・深鉢の口縁部破片。口縁部が外反し、アナタラ属の貝殻腹縁文が口縁部から斜行施文される。2は棒状工具による刺突文が施文される。時期は前期後半・浮島式期である。

(2) 土坑SK10 (Fig.12)

調査区の南西側DⅥ-14区緩傾斜縁部に位置し、立地する標高は26.74～26.77mを測る。平面形は確認面で長軸0.79m、短軸0.69mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大41.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は4層に分層可能である。1層黒褐色土は少量のローム粒・ロームブロックを含む。2層褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。4層黄褐色土はローム粒子・ロームブロックを多く含む自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

(3) 土坑SK15 (Fig.12)

調査区の西側DⅤ-9区の緩傾斜部に位置し、立地する標高は24.39～24.66mを測る。平面形は確認面で長軸1.14m、短軸0.93mを測り、南北にやや長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大62.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部がわずかに高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は5層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。4層暗黄褐色土はローム粒子を多く含む。5層暗黄褐色土はロームブロック・ローム粒子を多く含む自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

(4) 土坑SK17 (Fig.12)

調査区の北側FⅢ-15区平坦部に位置し、立地する標高は26.08～26.15mを測る。平面形は確認面で長

軸2.70m、短軸1.20mを測り、東西に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大25.0cmを測り、壁面は西側が外傾し、北側は緩傾斜して立ち上がる。底面はわずかに起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められず、北側が不明瞭である。

覆土は3層に分層可能である。1層暗褐色土はわずかにローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒を多く含む。底面中央部に堆積した3層暗褐色土はローム粒を多く含む自然堆積層である。黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

(5)土坑SK18 (Fig.12)

調査区の中央GⅣ-2・6区の平坦面に位置し、立地する標高は25.95~26.00mを測る。平面形は確認面で長軸1.07m、短軸0.34mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は北西側が窪み、平坦面がほとんどない。全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

(6)土坑SK19 (Fig.12・19)

調査区の中央GⅣ-12区の平坦部に位置し、立地する標高は26.11~26.18mを測る。平面形は確認面で長軸0.86m、短軸0.80mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大34.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面が少なく、横断面は播鉢状を呈し、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。また西側に小ピットが認められ、規模は長径22.0cm、短径20.0cm、深さ5.0cmで、円形を呈する。

覆土は5層に分層可能である。1層暗褐色土はわずかにローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒を少量含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。4層褐色土はローム粒子を多く含む。5層褐色土はロームブロック・ローム粒子を多く含む自然堆積層である。遺物は縄文土器が1点出土した。Fig.19-1は前期後半・深鉢の胴部破片。アナガラ属の貝殻腹縁文が施文される。時期は前期後半・浮島式期である。

(7)土坑SK20 (Fig.12)

調査区の中央GⅤ-9区の平坦部に位置し、立地する標高は26.59m前後を測る。南側約半分は未調査区域に広がっている。平面形は確認面で長軸1.03m、短軸0.63mを測り、円形を呈するものと推定される。また検出面からの深度は最大24.0cmを測り、壁面は緩傾斜して立ち上がる。底面は平坦面が少なく、ほぼ中央部がわずかな窪みが見られ、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は縄文土器が1点出土した。Fig.19-1は前期後半・深鉢の胴部破片。幅狭の平行沈線が施文される。時期は前期後半・浮島式期である。

(8)土坑SK21 (Fig.13)

調査区の中央GⅣ-16区の平坦面に位置し、立地する標高は25.89~26.03mを測る。平面形は確認面で

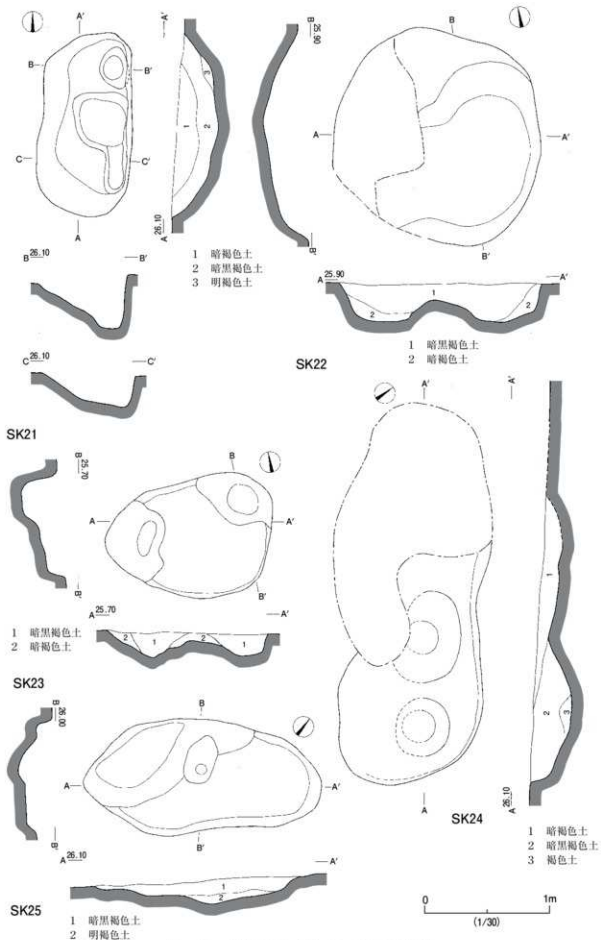


Fig. 13 土坑 S K 21・22・23・24・25 平面図

長軸1.45m、短軸0.70mを測り、南北に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大33.0cmを測り、壁面は東側が垂直気味に、西側は緩傾斜して立ち上がる。底面は平坦面が少なく、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は3層に分層可能である。1層暗褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層明褐色土はローム粒子を多く含む自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

(9)土坑SK22 (Fig.13・20)

調査区の東側HⅣ-4区の平坦面に位置し、立地する標高は25.80~25.88m前後を測る。平面形は確認面で長軸1.68m、短軸0.94mを測り、略円形を呈する。また検出面からの深度は最大22.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面がなく中央部が高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。1層暗褐色土はわずかにローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒を多く含む自然堆積層である。遺物は縄文土器が2点出土した。Fig.20-1は前期後半・深鉢の胴部破片。ロッキング施文によるいわゆる三角文である。2は無節縄文が薄く施文される。時期は前期後半・浮島式期である。

(10)土坑SK23 (Fig.13)

調査区の北東側HⅣ-3区の平坦部に位置し、立地する標高は25.53~25.61mを測る。平面形は確認面で長軸1.34m、短軸0.94mを測り、東西に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大12.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面がなく、中央部が高く起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。なお、東西両端に窪みがあり、西側は長径65.0cm、短径47.0cmで深さ7cm、不正円形を呈する。東側は長径65.0cm、短径39.0cm、深さは17.0cmで、不正楕円形を呈する。

覆土は2層に分層可能である。1層暗褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

(11)土坑SK24 (Fig.13・22)

調査区の中央GⅣ-11・15区の平坦部に位置し、西側が大きく攪乱を受けている。立地する標高は25.79~25.97mを測る。平面形は確認面で長軸2.99m、短軸1.00mを測り、南北に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大14.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部がわずかに高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。なお、南北に窪みがあり、北側は、長径72.0cm、短径43.0cm、深さ5cmで楕円形を呈する。南側は長径46.0cm、短径43.0cm、深さ7cmで円形を呈する。

覆土は3層に分層可能である。1層暗褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層褐色土はローム粒を多く含む。自然堆積層である。遺物は縄文土器が2点出土した。Fig.22-1は前期末葉・深鉢の口縁部破片。口唇部に縄文施文されている。2は縄文地文に平行沈線が施文されている。時期は前期後半期である。

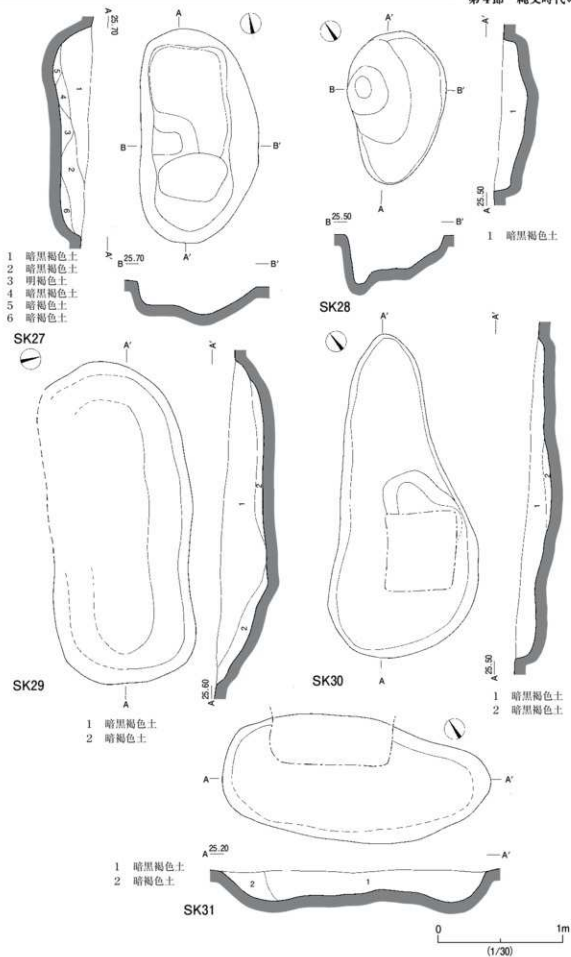


Fig. 14 土坑 S K 27・28・29・30・31 平面図

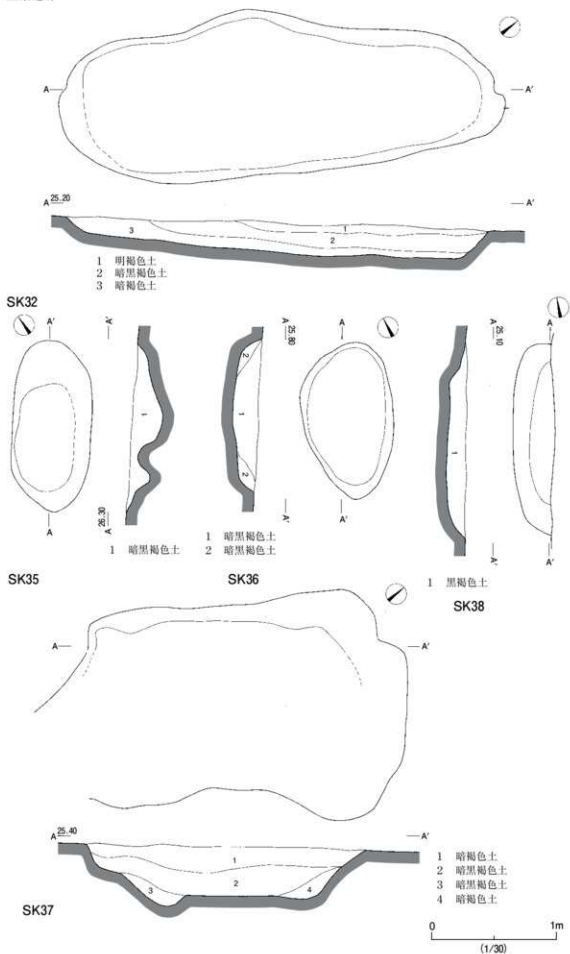


Fig. 15 土坑 S K 32 · 35 · 36 · 37 · 38 平面図

02土坑SK25 (Fig.13)

調査区の中央GⅣ-11区の平坦部に位置し、立地する標高は25.79~25.97mを測る。平面形は確認面で長軸1.91m、短軸0.88mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は22.0cmで、壁面は緩傾斜して立ち上がる。底面は平坦面が少なく、西側が大きく窪み、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。またほぼ中央にピットが認められる。規模は長径39.0cm、短径23.0cm、深さ5.8cmで楕円形を呈する。

覆土は2層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層明褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

03土坑SK27 (Fig.14・20)

調査区の北東側HⅣ-3区の平坦部に位置し、立地する標高は25.49~25.57mを測る。平面形は確認面で長軸1.71m、短軸0.93mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大27.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部から南側が低く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は6層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒をわずかに含む。3層明褐色土はローム粒を多く含む。4層暗黒褐色土はローム粒子を多く含む。5層暗褐色土はローム粒子を多く含む。6層暗褐色土はロームブロック・ローム粒子を多く含む自然堆積層である。遺物は縄文土器が1点出土した。Fig.20-1は前期後半・深鉢の胴部破片。平行沈線による山形文が施文される。時期は前期後半・浮島式期である。

04土坑SK28 (Fig.14)

調査区の北東側HⅣ-3区の平坦部に位置し、立地する標高は25.36~25.44mを測る。平面形は確認面で長軸1.23m、短軸0.77mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大7.8cmを測り、壁面は西側が垂直気味に、東側は緩傾斜して立ち上がる。底面は平坦面が少なく、西側が低く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。西端に長径39.0cm、短径32.0cm、深さ4.6cmを測る円形ピットが穿ってある。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

05土坑SK29 (Fig.14)

調査区の北東側HⅣ-2・3区の平坦部に位置し、南側半分が大きく擾乱を受けている。立地する標高は25.42~25.57mを測る。平面形は確認面で長軸2.58m、短軸1.16mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大31.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部がわずかに低く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

⑥土坑SK30 (Fig.14)

調査区の北東側HV-2・6区の平坦部に位置し、立地する標高は25.15~25.34mを測る。平面形は確認面で長軸2.58m、短軸0.93mを測り、南北に長い不正楕円形でみかけは瓢箪形を呈する。また検出面からの深度は最大18.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は南東部が低く、径50cm前後の窪みを有し、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

⑦土坑SK31 (Fig.14)

調査区の北東側HV-5・6区の平坦部に位置し北側の一部が擾乱を受けている。立地する標高は25.07~25.08mを測る。平面形は確認面で長軸2.14m、短軸0.94mを測り、東西に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部が高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

⑧土坑SK32 (Fig.15)

調査区の北東側HV-5・6区の平坦部に位置し、立地する標高は24.98~25.10mを測る。平面形は確認面で長軸3.56m、短軸1.29mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は3層に分層可能である。1層暗褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

⑨土坑SK35 (Fig.15)

調査区の北東側HV-14・15区の平坦部に位置し、立地する標高は25.07~25.16mを測る。平面形は確認面で長軸1.36m、短軸0.63mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大23.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部が高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は暗黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

⑩土坑SK36 (Fig.15)

調査区の東側HV-8区の平坦部に位置し、立地する標高は25.55~25.63mを測る。平面形は確認面で長軸1.24m、短軸0.73mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大20.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒を

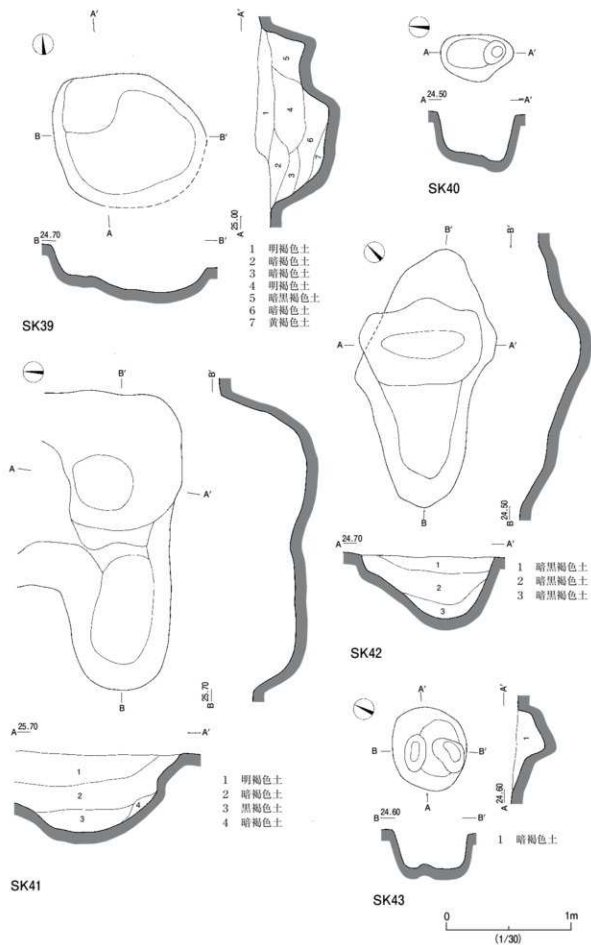


Fig. 16 土坑 S K 39・40・41・42・43 平面図

わずかに含む自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

20土坑SK37 (Fig.15)

調査区の東側 IⅣ-4、IⅣ-1 区の平坦部に位置し、立地する標高は25.27~25.34mを測る。平面形は確認面で長軸は2.25m、短軸1.46mを測り、南北に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大40.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部が平坦で、南側に窪みがみられ低く、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は4層に分層可能である。1層暗褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗黒褐色土はローム粒を多く含む。4層暗褐色土はローム粒子を多く含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

22土坑SK38 (Fig.15)

調査区の北東側 HⅣ-14・15区の平坦部に位置し、東側約半部が未調査区域に広がっている。立地する標高は24.88~24.89mを測る。平面形は確認面で長軸1.49m、検出部短軸0.33mを測り、南北に長い楕円形を呈するものと推定される。また検出面からの深度は最大13.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は北側がわずかに低く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

23土坑SK39 (Fig.16)

調査区の北東側 HⅢ-7・8・11・12区の平坦部に位置し、立地する標高は24.48~24.86mを測る。平面形は確認面で長軸1.21m、短軸1.03mを測り、楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大42.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面が少なく、北側が高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は7層に分層可能である。1層明褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。4層明褐色土はローム粒子を多く含む。5層暗黒褐色土はロームブロック・ローム粒子を多く含む。6層暗褐色土で少量のローム粒・ロームブロックを含む。7層黄褐色土で少量のローム粒・ロームブロックを含む。締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は縄文土器が1点出土した。Fig.19-1は前期後半・深鉢の底部破片。器厚は薄く、上げ底気味を呈している。時期は前期後半であろう。

24土坑SK40 (Fig.16・22)

調査区の北東側 IⅢ-4 区の平坦部に位置し、立地する標高は24.38~24.41mを測る。平面形は確認面で長軸0.57m、短軸0.37mを測り、楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大4.1cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は南側が低く、傾斜しており、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。また南端には長径19.0cm、短径16.0cm、深さ5cmの楕円形ピットが穿つてある。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は縄文土器が1点出土した。Fig.22-1は前期後半・深鉢の胴部破片と思われる。無

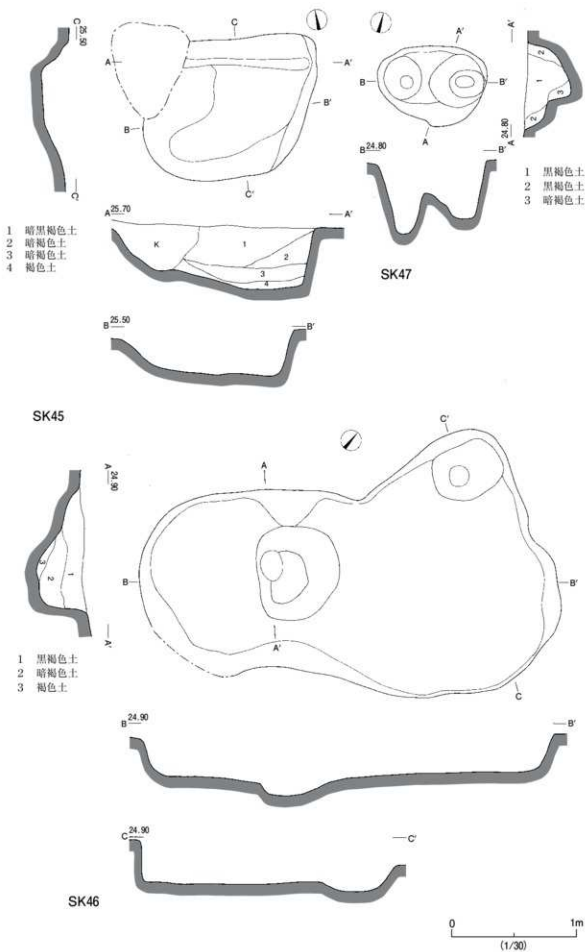


Fig. 17 土坑 S K 45・46・47 平面図

III 二重堀遺跡

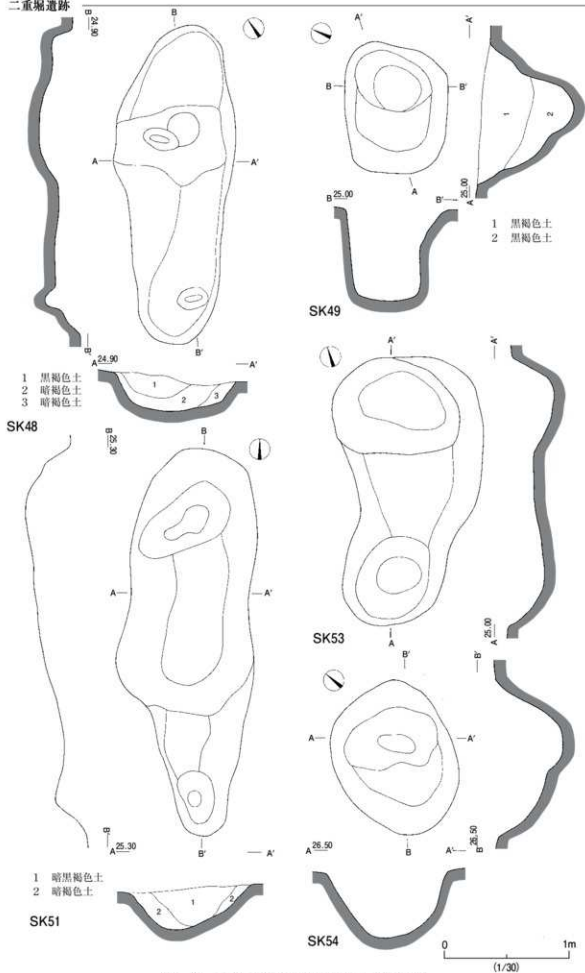


Fig. 18 土坑 S K 48・49・51・53・54 平面図

文である。時期は前期後半であろう。

25土坑SK41 (Fig.16)

調査区の北東側HⅢ-15、IⅢ-3区の平坦部に位置し、北側が攪乱を受け、壁面が明瞭ではない。立地する標高は25.37～25.65mを測る。平面形は確認面で長軸1.07m、短軸0.93mを測り、東西に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大61.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部が高く、起伏をもち、二基の窪みが繋がりちょうど瓢箪型をなしている。全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は4層に分層可能である。1層明褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層黒褐色土はローム粒を多く含む。4層暗褐色土はローム粒子を多く含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

26土坑SK42 (Fig.16)

調査区の北東側IⅢ-3・4区の平坦部に位置し、立地する標高は24.28～24.62mを測る。平面形は確認面で長軸2.03m、短軸0.97mを測り、南北に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大22.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面がなく、北側中央部が窪み、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は3層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗黒褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗黒褐色土はローム粒を多く含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

27土坑SK43 (Fig.16)

調査区の北東側IⅢ-8区の平坦部に位置し、立地する標高は24.47～24.54mを測る。平面形は確認面で長軸0.58m、短軸0.65mを測り、略円形を呈する。また検出面からの深度は最大24.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面がなく、中央部がわずかに高く、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は暗褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

28土坑SK45 (Fig.17・20)

調査区の中央GⅣ-9区の平坦部に位置し、西側が攪乱を受けている。立地する標高は25.41～25.65mを測る。平面形は確認面で長軸1.30m、短軸1.10mを測り、隅丸方形を呈する。また検出面からの深度は最大46.8cmを測り、壁面は北側から東側が垂直気味に、南側と西側は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、わずかな起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は4層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。4層褐色土はローム粒子を多く含む。自然堆積層である。遺物は縄文土器が1点出土した。Fig.20-1は前期後半・深鉢の胴部破片。平行沈線文が施文される。時期は前期後半である。

㉙土坑SK46 (Fig.17)

調査区の北東側 IⅣ-6・7区の平坦部に位置し、立地する標高は24.68~24.88mを測る。平面形は確認面で長軸3.32m、短軸1.46mを測り、東西に長い不正楕円形で、瓢箪型を呈する。また検出面からの深度は最大31.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。また中央南側と北端に浅い窪みがみられる。中央南側のピットは長径74.0cm、短径65.0cm、深さ13.6cmで隅丸長方形。北端は、長径55.0cm、短径43.0cm、深さ8.0cmで隅丸長方形を呈する。

覆土は3層に分層可能である。1層黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層褐色土はローム粒を多く含む。自然堆積層である。遺物は縄文土器が15点出土した。いずれも小破片であり、図示できたのはFig.21-1のみである。1は後期中葉・浅鉢の口縁部破片。口辺部に凹帯が走り、内外面とも無文である。時期は後期中葉・加曾利B式期である。

㉚土坑SK47 (Fig.17)

調査区の北東側 IⅣ-2区の平坦部に位置し、立地する標高は24.68~24.72mを測る。平面形は確認面で長軸0.86m、短軸0.60mを測り、二基のピットが連結したもので楕円形を呈する。また検出面からの深度は中央部で25.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。西側のピットの規模は、長径33.0cm、短径29.0cm、深さ56.0cmの円形。東側ピットの規模は、長径44.0cm、短径42.0cm、深さ45.0cmで円形を呈する。したがって、底面は中央部が高くなっており、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は3層に分層可能である。1層黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層黒褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。自然堆積層である。遺物は縄文土器が5点出土した。Fig.22-1は前期後半・深鉢の口縁部破片。口縁部下端に三角形の刻みが施される。3・4・6は深鉢の胴部破片。縦位の櫛歯状工具による条線文が垂下する。5は無文である。時期は前期後半・浮島式期である。

㉛土坑SK48 (Fig.18)

調査区の北東側 IⅣ-3区の平坦部に位置し、立地する標高は24.76~24.85mを測る。平面形は確認面で長軸2.54m、短軸0.97mを測り、南北に長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大17.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面がわずかに広がり、北側に浅い窪みがみられ、そのなかにピットを伴い、さらに南端にピットが穿っており、2本ピットが存在する。しかし、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。まず北側の小ピットの規模は長径29.0cm、短径17.0cm、深さ12cmで、楕円形を呈する。南端のP2は、長径25.0cm、短径16.0cm、深さ27.0cmで楕円形を呈する。

覆土は3層に分層可能である。1層黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。3層暗褐色土はローム粒を多く含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

㉜土坑SK49 (Fig.18)

調査区の北東側 HⅣ-15、IⅣ-3区の平坦部に位置し、立地する標高は24.84~24.95mを測る。平面形は確認面で長軸1.00m、短軸0.81mを測り、東西に長い隅丸長方形を呈する。また検出面からの深度は

最大69.0cmを測り、壁面は西側が垂直気味に対して他三面は外傾して立ち上がる。底面は東側に窪みがみられ、その規模は長径59.0cm、短径43.0cm、深さ73.0cmの楕円形を呈する。全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は2層に分層可能である。1層黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層黒褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

33土坑SK51 (Fig.18)

調査区の北東側HⅣ-15・16区の平坦部に位置し、立地する標高は24.97~25.14mを測る。平面形は確認面で長軸3.05m、短軸0.93mを測り、南北に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大32.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は南側がわずかに高く、ここから北側に向かって緩傾斜しており、起伏があり、全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。また南北両端にはピットが穿ってある。北側ピットの規模は、長径80.0cm、短径400cm、深さ37.0cmの楕円形。南側は、長径42.0cm、短径25.0cm、深さ25.0cmの楕円形を呈する。

覆土は2層に分層可能である。1層暗黒褐色土は少量のローム粒を含む。2層暗褐色土はローム粒をわずかに含む。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

34土坑SK53 (Fig.18)

調査区の東側IⅣ-8・12区の平坦部に位置し、立地する標高は24.87~24.90mを測る。平面形は確認面で長軸2.10m、短軸0.97mを測り、南北に長い不正楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大18.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は中央部がわずかに高く、南北にピットが2基穿ってあり、結果的に瓢箪型をなす。全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。北側のピットの規模は、長径102.0cm、短径73.0cm、深さ34.0cmの楕円形を呈し、南側は、長径70.0cm、短径54.0cm、深さ28.0cmで楕円形を呈する。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

35土坑SK54 (Fig.18)

調査区の南西側DⅥ-14区の平坦部に位置し、立地する標高は26.33~26.37mを測る。平面形は確認面で長軸1.20m、短軸0.95mを測り、南北にやや長い楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大35.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦面がなく、北側半部に窪みがみられる。窪みの規模は長径75.0cm、短径44.0cm、深さ53.0cmの楕円形を呈する。全体的に軟弱で、踏み固められた痕跡は認められない。

覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

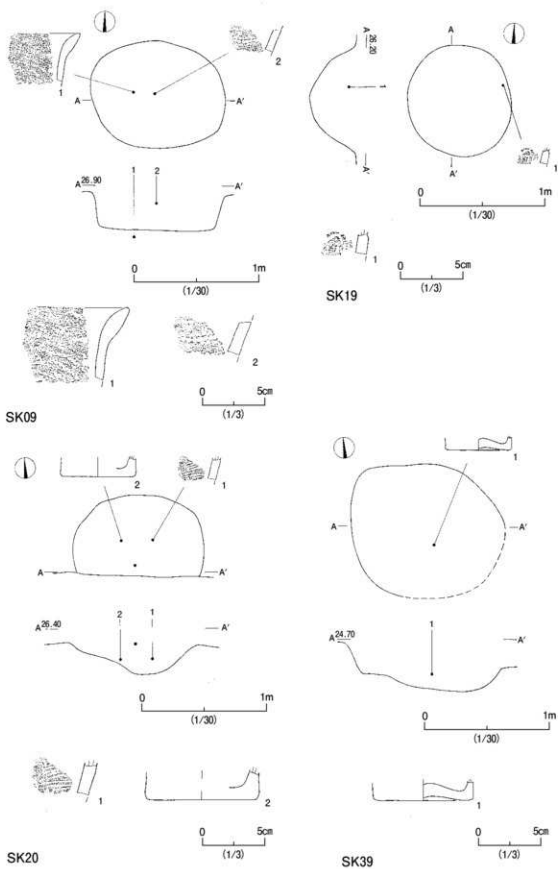


Fig. 19 土坑 S K 09・19・20・39遺物及び遺物分布図

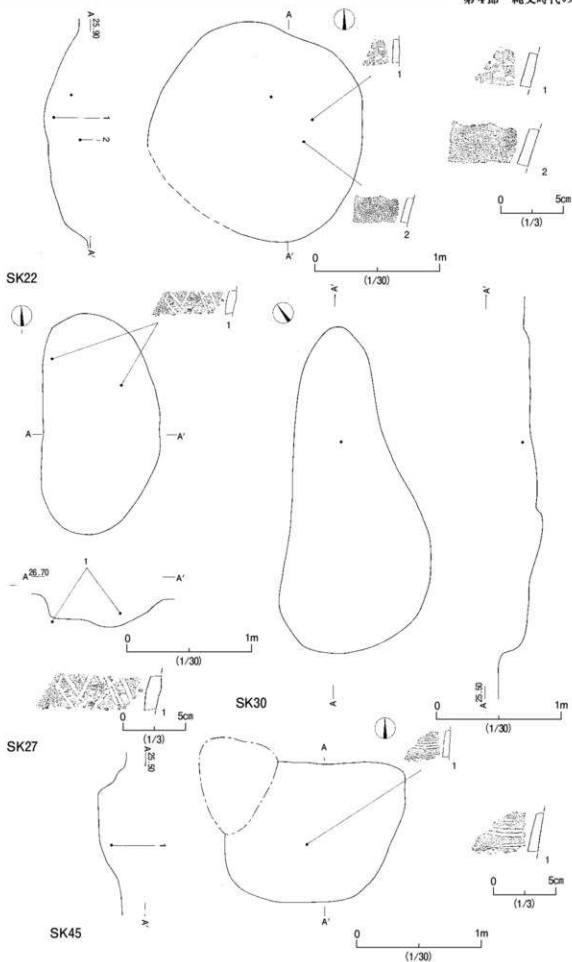


Fig. 20 土坑 S K 22・27・30・45遺物及び遺物分布図

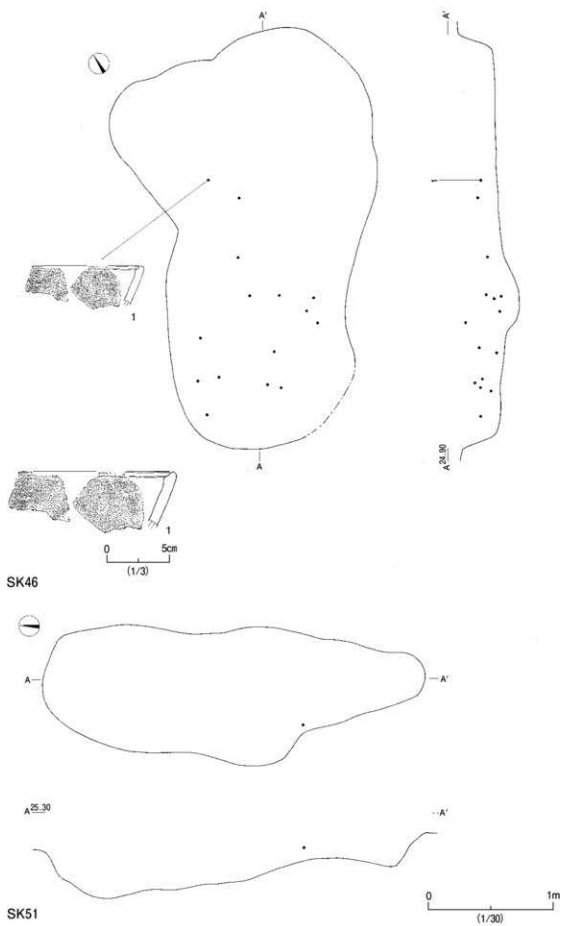


Fig. 21 土坑 S K 46・51遺物及び遺物分布図

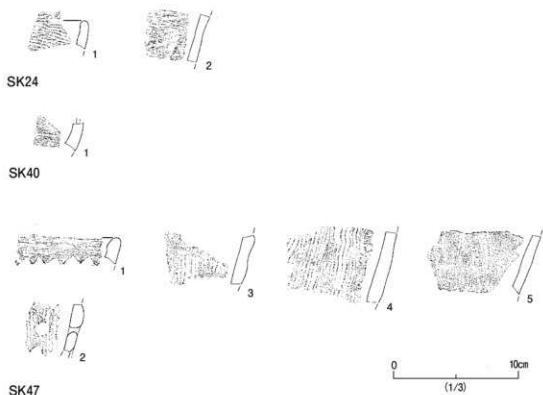


Fig.22 土坑S K24・40・47出土遺物

3) 遺構外の出土遺物

縄文時代の遺構である竪穴状遺構および土坑出土以外の遺物をまとめる。大半は遺物包含層より出土したもので、時期は早期前半燃糸文系土器から晩期の土器群のほか、石鏃や磨石類等の石器も検出された。

1. 縄文土器

a) 早期の土器 (Fig.23-1・2, 5~13)

1・2は早期前半・燃糸文系土器である。いずれも破片で、1・2は口縁部破片である。1は丸頭状口縁がやや内湾気味を呈し、口唇部上端に無文帯をもうけ、Rの細い燃糸文を縦状に間隔を開けて施文する。2は口唇部が丸頭状でもやや扁平に整形し、わずかに外反する。やはり口唇部上端に無文帯をもうけ、燃糸Rを縦状に間隔を開けて施文する。なお、燃糸文は細めと太め施文がみられる。稲荷台式土器である。

5~13は中葉・沈線文系土器である。5・6・11は同一個体と思われる。格子目文を地文に横位の沈線文を施こしているもので、5の沈線間は格子目文に、6の沈線間が鋸歯状を呈している。7~9・11も細沈線による格子目文が施文されている。12胴部破片で、細密沈線文を横位と斜位に施されている。13も鋸歯状工具により縦位と斜位に幾何学的に施文する。

b) 前期の土器 (Fig.23-3・4, 14~41, Fig.25, Fig.26, Fig.28~30, Fig.33~37 PL10~12)

Fig.23-14~41, Fig.25-42は前期中葉・黒浜式土器を一括する。14~26は竹管状工具によるモチーフを施すもので、14・15は口縁部破片である。14は波状口縁の深鉢で波頂部を中心に多載竹管による菱形文を描出する。15は口縁部が内湾し、半載竹管状工具による横位の区画文内に、弧状文を充填する。16・17は同一個体である。縄文地文に半載竹管状工具によるモチーフを施す。18は4本単位の筒状工具による横位の波状文を施文する。19~27, 29~31は多載竹管工具による格子目文を描出する胴部破片。28, 32~39は縄文施文の深鉢を一括する。32は口縁部破片で34と同一個体である。また33も口縁部破片である。いずれも単口縁で、無節Lの横位施文。35・36も胴部破片で、無節L施文である。37は単節LR, 38は合燃Lを施文する。40・41は底部破片である。やや上げ底気味で、40は鋸歯描文、41は縄文施文である。Fig.25-42-1, -2は同じ土器であるが、実測図と拓本図の二通りを図示した。実測図で表現できない縄文施文が確認できるものと推定したからである。この土器は口径17.5cmを測る鉢である。体部は外傾して立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。口唇部上に等間隔に刺突文が巡る。体部はヘラケズリ整形が施されており無文であるが、下半部に縄文施文と推定される筋状の痕跡がみられる。以上はいずれも胎土に多量の繊維を含む。

Fig.26~Fig.30, Fig.33-176~182は前期後葉・浮島式土器を一括する。

Fig.26-43は胴部破片である。燃糸文Rを地文に、爪形文と弧状の平行沈線文を施文する。Fig.26-44~71は爪形文を施文するもので44~56は口縁部破片である。44は二列のロッキング手法による変形爪形文下は波状具段文が施文される。45は小突起を有する波状口縁の深鉢。波頂部は肥厚し、口縁部に平行して変形爪形文を巡らし、爪形文施文後刺突文および斜行する平行沈線文が施される。46は口縁部が外反する平縁の深鉢で、二列の変形爪形文を巡らし、爪形文内に刺突文を施文し、胴部は平行沈線による弧線文を施す。47・51は同一個体で、口唇部が肥厚し、口縁部は直行する深鉢。口縁部に二列平行する変形爪形文間に刺突文を巡らし、胴部にも変形爪形文を区画文として施し、区画内に幅狭な平行沈線による菱形文が施文される。48は口唇部を内削状に整形し、口縁に平行して二列の変形爪形文を巡らす。胴部は平行沈

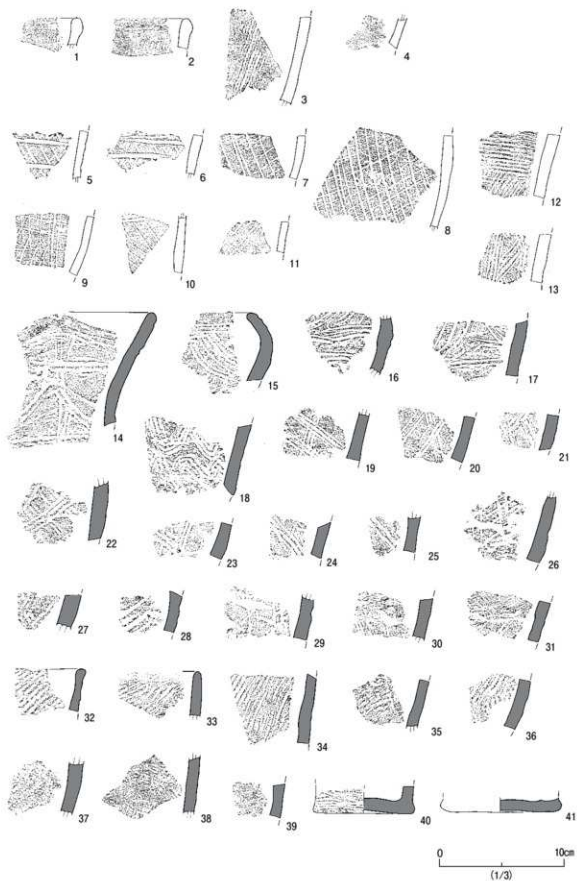


Fig. 23 縄文早期・前期中葉の土器

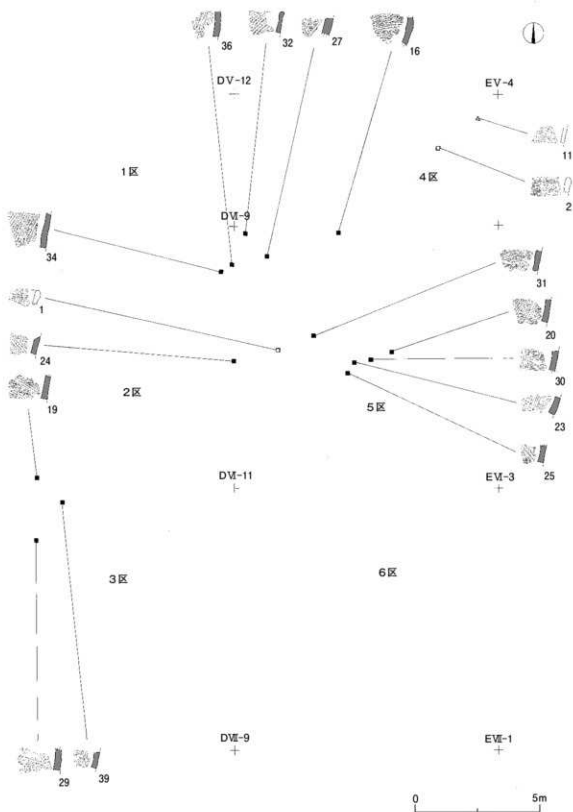


Fig. 24 縄文早期・前期中葉出土土器分布図

線文。49の口唇部は外削状を呈し、やはり二列の変形爪形文に胴部は斜行する平行沈線文を施文する。50は口唇部が角頭状を呈し、二列の変形爪形文間に斜行する刺突文を施す。53は口唇部下に無文帯をもち、幅狭な変形爪形文を施文する。54・55は口唇部が外削状を呈し、口唇部上に平行する短沈線を施文する。56は平行する変形爪形文間に斜行する短沈線が施文される。57～69は深鉢の胴部破片である。57は平行する爪形文間に平行沈線文が施文される。58も平行する変形爪形文間に平行沈線文による菱形文を施文し、菱形文間に半截竹管による刺突文を充填する。59・61は平行沈線文による弧状文下に変形爪形文が巡り、爪形文内に有節平行線文を施す。60～67は変形爪形文間に平行沈線文が施文される。68はさらに有節平行線文が施文される。69は平行する変形爪形文間に斜行短沈線を充填させ、下位に無節Lに結節縄文がみられる。70・71は同一個体の口縁部破片である。口唇部に細い刻目が巡り、口縁部に平行して二列の爪形文が周回する。胴部は平行沈線による菱形文が施文される。72～74は平行短沈線文が施文されている。Fig. 27～75は胴部上半部および底部が遺存している深鉢。胴括れ分に低隆帯が巡り、地文として横位平行線は密接して施され、条線文に類似する。76～82も同様に横位もしくは菱形の平行線を施文する。また83・84は斜行の平行線である。Fig. 23-3・4は胴部破片。いずれも燃糸Rが施文されている。

Fig. 28-85～88・91～110、Fig. 29-111～145は波状貝殻文が施文されるものを一括する。85～88、91～94は口縁部破片である。85は角頭状の口唇部上に斜行する刻目を巡らす。口縁部は無文帯をもち、波状貝殻文を施文する。86は口唇部が内削状を呈し、アナガラ属の波状貝殻文を施文する。87は口唇部に短沈線文が施され、口縁部は無文帯とし波状貝殻文が施文される。88は口縁部に縦位の短沈線文を施し、胴部は波状貝殻文を施文する。91は口唇部に角状施文具による刺突文が施文され、ちょうど小波状口縁を呈している。口縁部から波状貝殻文が施されている。92～94は同一個体である。口縁部は無文帯とし、口縁下端はヘラ状工具による押捺文が施され、胴部は波状貝殻文を施文する。95は胴部破片であるが、口縁下端が指頭状押捺が施され、胴部は波状貝殻文が施文される。96～110およびFig. 29-111～138も胴部破片で、いずれも波状貝殻文が施文されているが、111は胴部中位から下位の破片で、縦位の沈線が加わる。同じように117も波状貝殻文に縦位の沈線が施されている。また118、119、139は貝殻復縁による変形爪形文様に施文している。なお、116、120～138はアナガラ属の波状貝殻文である。140、141は密接する波状貝殻文が施され、140は二列の平行沈線による区画文が施されている。142は口縁部に縦位の細い沈線を施す。胴部はアナガラ属の波状貝殻文を施文する。

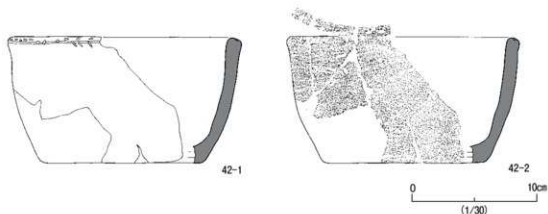


Fig. 25 縄文前期中葉の土器

Fig.30-146~174はロッキング手法による三角文が施文されたもので、146~148は同一個体である。口唇部が尖頭状の波状口縁を呈する。比較的細い三角文が施されている。149は明瞭な三角文が重刷する。

Fig.33-175、176は同一個体で、口縁部が外反する深鉢。口縁部は指頭状押捺による凹凸文で、胴部は変形爪形文を施文する。177は口唇部が丸頭状で、口縁部下端部が指頭状押捺による凹凸文を施す。178も丸頭状の口唇部をもち、口唇下から指頭状押捺文を施す。179は口唇部が角頭状を呈し、口唇部は刻目を施し、口縁部はヘラ状工具による刺突文を施し、弧状の平行沈線を施文する。

Fig.28-90、Fig.29-145は口縁部にアナガラ属の貝殻を押捺している。Fig.33-180~182は口縁部に縦位の条線帯をもち、180は半截竹管による爪形文、181は棒状工具による押捺文、182は沈線区画内に刺突文を施す。183は沈線区画内にアナガラ属の貝殻復縁による押捺文を充填する興津式である。184、185は同一個体である。集合沈線文により施文される諸磯c式である。186、187は口縁部破片の同一個体である。口縁部上端は縦位の短沈線を施し、胴部は細い単沈線によるモチーフをもつ。188~190は口唇部に刻目を有し、胴部は沈線による区画文をみる。191~207は平行沈線文が施されたもので、191は口縁部破片で、縦位の平行沈線文を垂下させる。192は櫛歯状工具による条線を斜行に垂下させる。193・194は同一個体で、平行沈線により弧線文を施文する。195は櫛歯状工具による。196~207は縦位の沈線文を垂下させる。

Fig.34-208~231、Fig.35-240は同一個体である。口径40cmの平緑の大型節深鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、単節LRを地文に口縁部下部に一条の沈線を巡らし、胴下半部では結節縄文がみられる。また部分的に縄文をヘラ状工具により磨消している。

Fig.35-232~246は縄文施文の土器である。232は口径26cmを測る深鉢の口縁部破片。口縁部に平行する二段の低隆帯上に単節RL縄文を施文し、内面には凹帯が巡る。233は胴部破片。単節LR縄文を施文する。234は結節縄文がわずかに観察できる程度で、原体は単節LRと推定される。235は細い単節RLを施文する。236は羽状縄文で単節RLを施文する。238は結節縄文である。Fig.35-247~262は無文で、ヘラケズリもしくはヘラナデによって整形されている。

Fig.36-263~279はいずれも接合できないが、胎土および施文等からみて同一個体と思われる。263と264が口縁部破片である。平緑で、口縁部が内湾気味となる深鉢で、263・264は単節RLを地文とする。口縁部下から円形押捺文と円形穿孔部が縦位に区画し、さらに平行沈線文を垂下させる。口縁部には爪形文による楕円形区画文を配する。265・268は十字状に爪形文を施し、交点と直上部に円形押捺文を配する。276~279は括れ部付近の破片で、二列平行する爪形文が施されている。諸磯a式土器。280は平行沈線による弧状文。281~283は同一個体であろう。浮線文を有する諸磯b式土器で、地文に縄文施文され、貼付による浮線文上に縄文が施文されている。284は浅鉢である。体部下半部は欠損しており、口径16.5cm、最大径は体部中位に位置し20.5cmを測る。口縁部は大きく内湾し、二個一對の円孔を伴う。無文地で赤彩が認められる。285は口縁部がくの字状に外反し、口唇部に斜行する刻目がみられる。頸部に二条の細隆帯が巡り、隆帯間に等間隔の円孔が穿ってある。286は無文帯の口縁部は外傾して開き、頸部に刻目を有する隆帯が周回する。287・288は同一個体であろう。壺の胴部破片である。内湾する体部から頸部が「く」の字状に口縁部が外反する。無文である。289も頸部付近に低隆帯が巡る。

Fig.37-290~315は深鉢の底部破片である。290の底面にはヘラ調整が施されている。315は底部の破片であるが、体部の剥離面が明瞭ではないため、底部としての成成品と推定される。



Fig.26 縄文前期後葉の土器 (1)

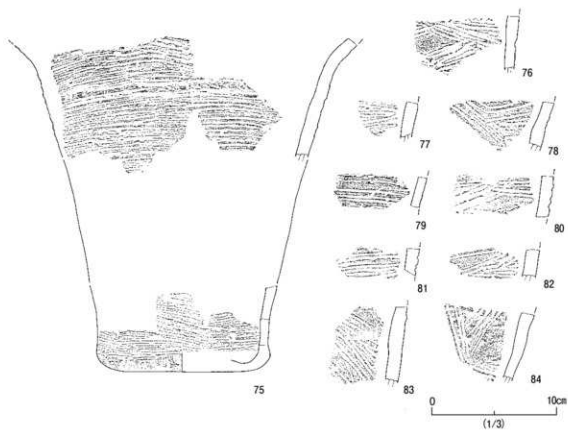


Fig.27 縄文前期後葉の土器（2）

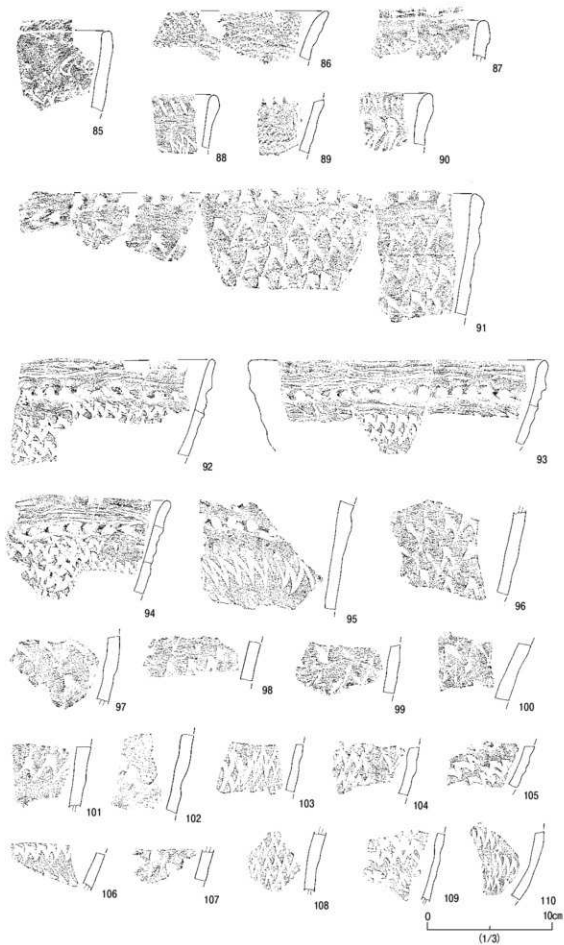


Fig.28 縄文前期後葉の土器 (3)

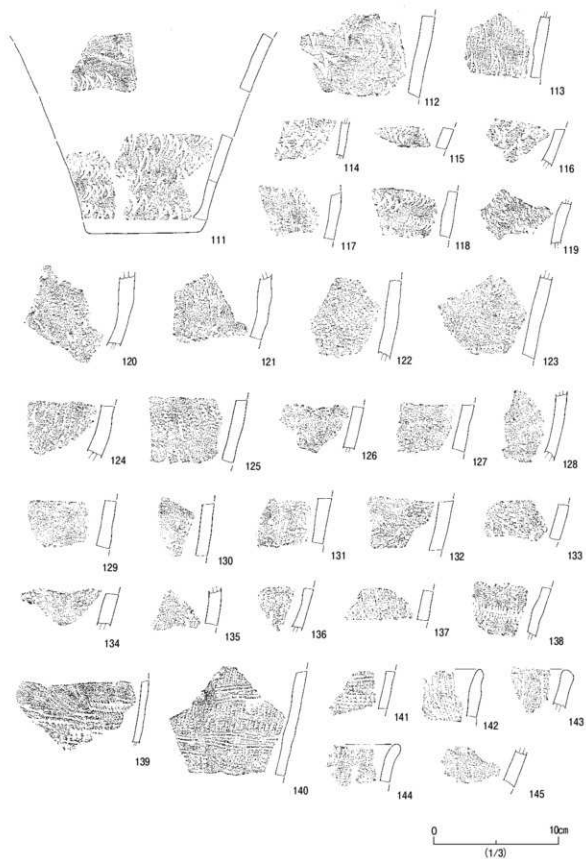


Fig.29 縄文前期後葉の土器（4）

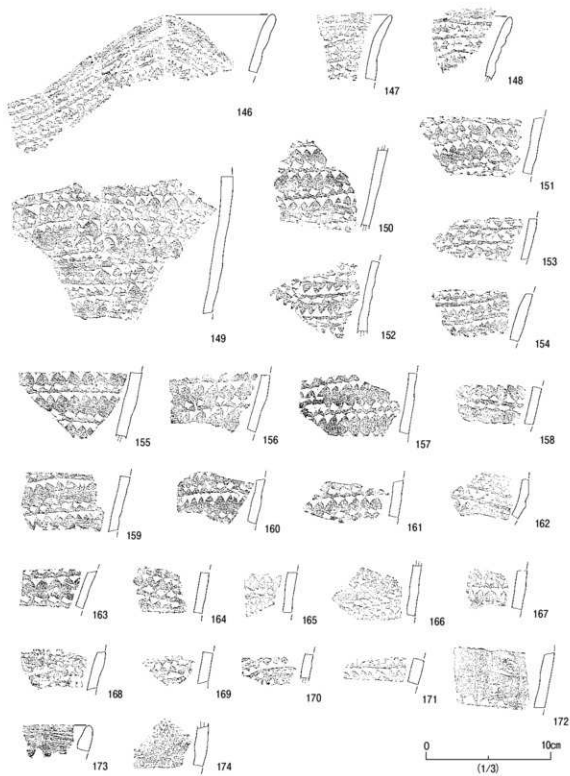


Fig.30 縄文前期後葉の土器 (5)

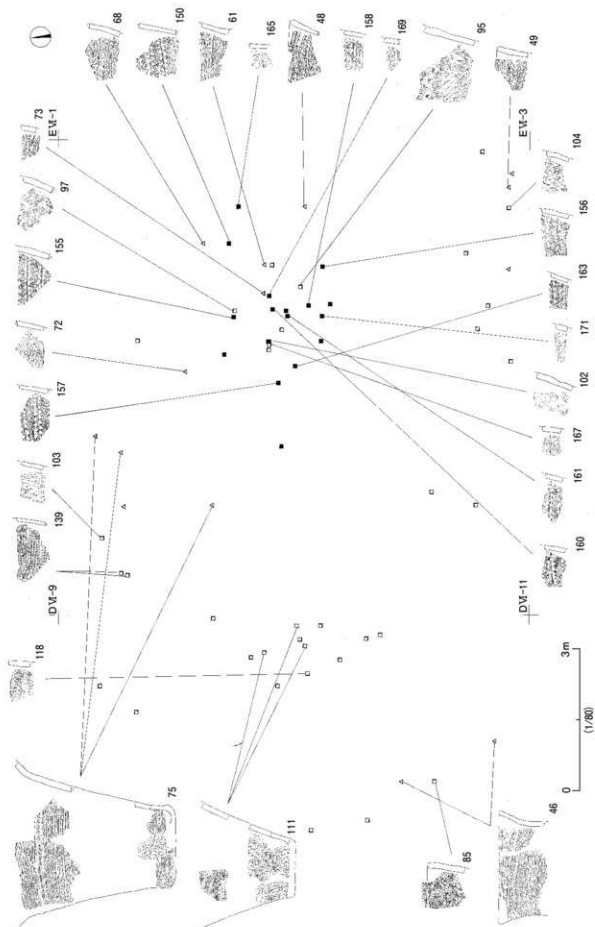


Fig.31 縄文前期後葉出土土器分布図

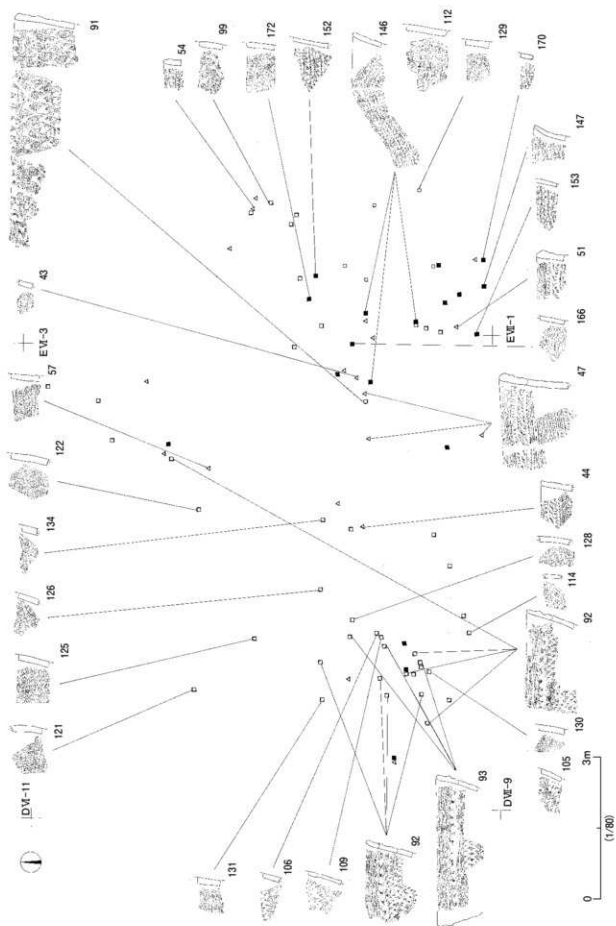


Fig.32 縄文前期後葉出土土器分布図

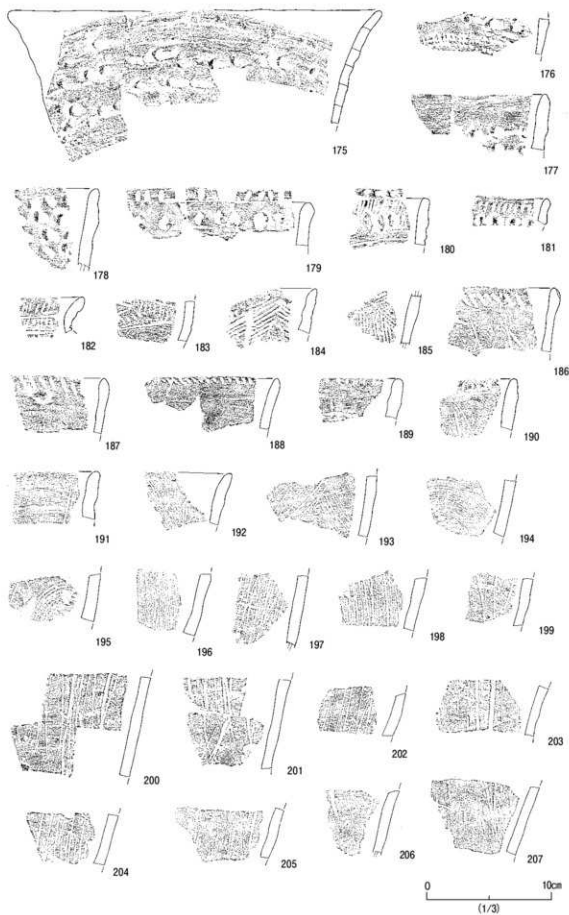


Fig. 33 縄文前期後葉の土器 (6)

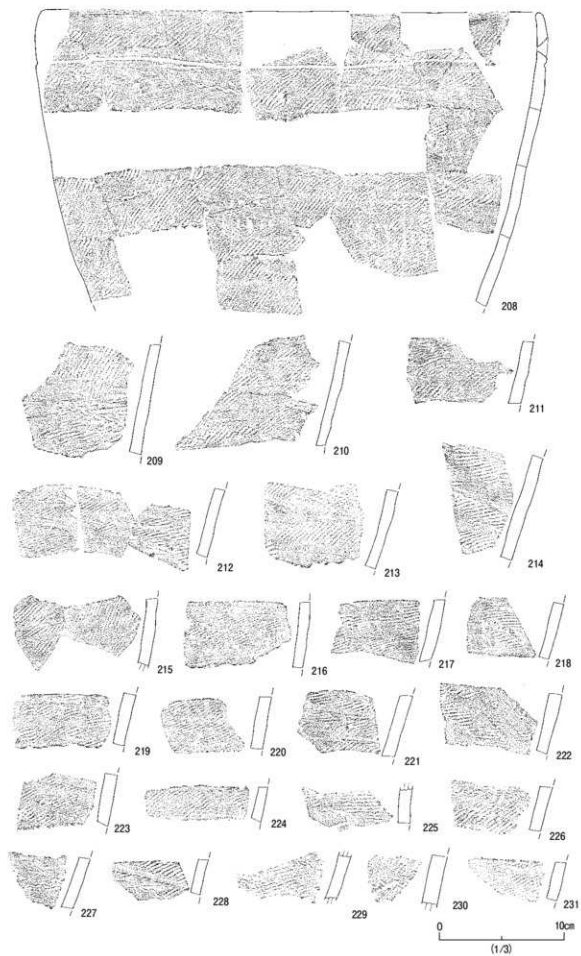


Fig.34 縄文前期後葉の土器（7）

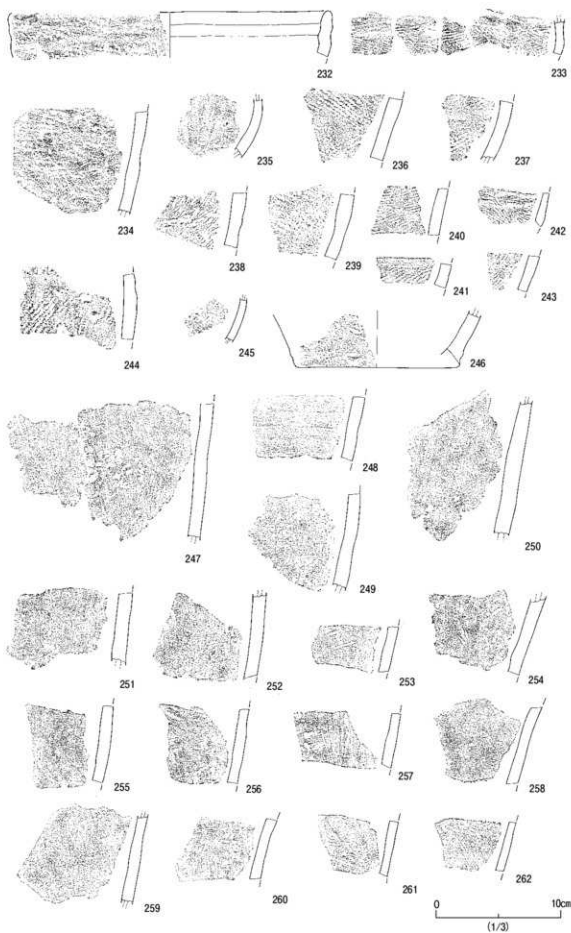


Fig.35 縄文前期後葉の土器 (8)

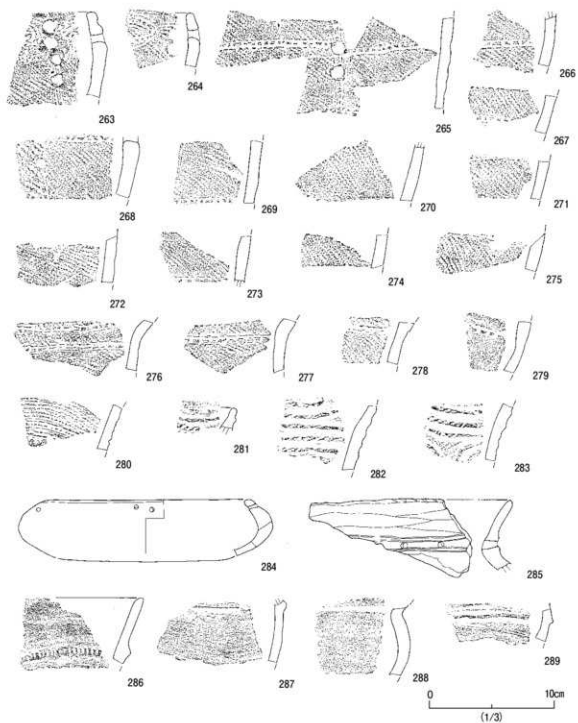


Fig.36 縄文前期後葉の土器(9)

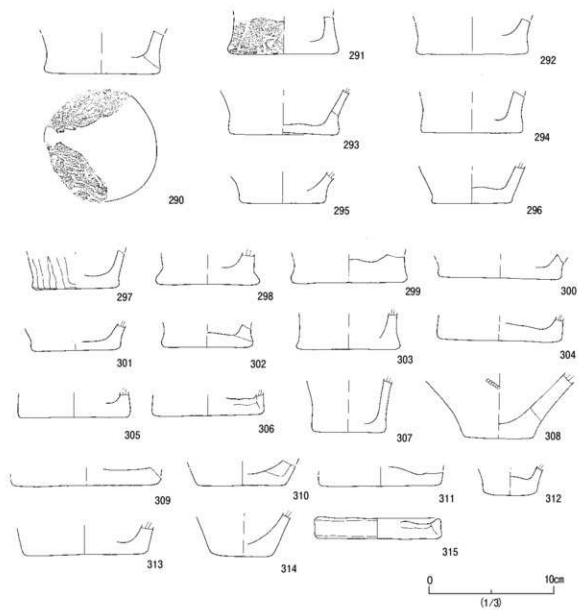


Fig. 37 縄文前期の土器

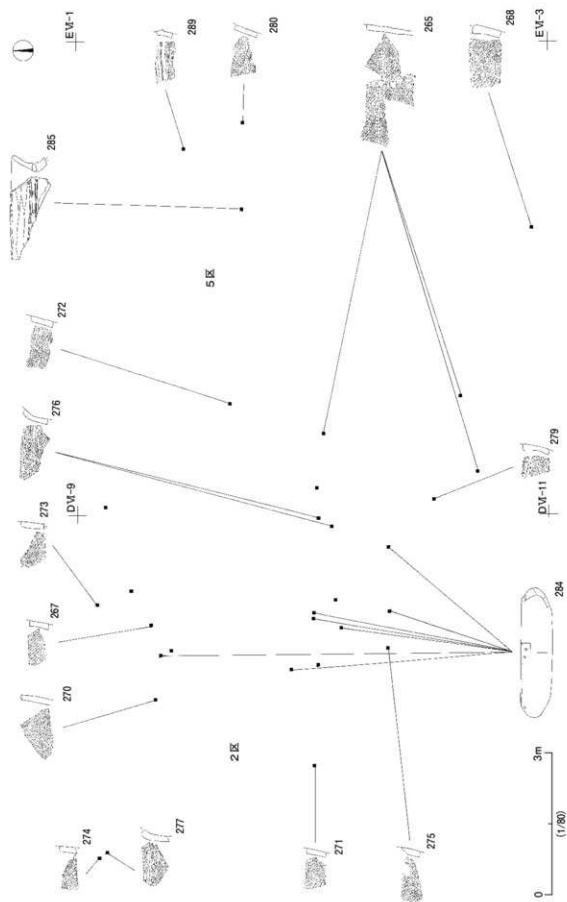


Fig.38 縄文前期後葉出土土器分布図

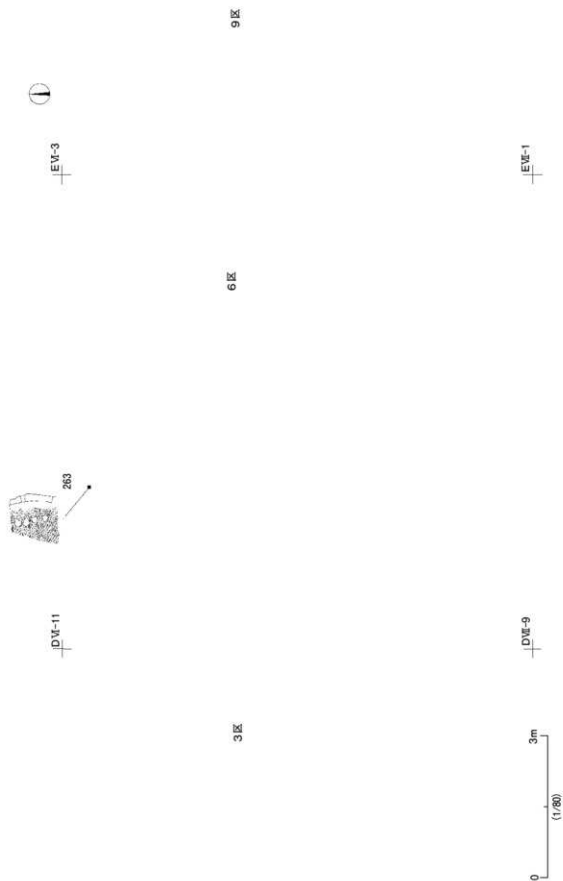


Fig.39 縄文前期後葉出土土器分布図

c) 中期の土器 (Fig.40-316~333)

Fig.40-316~330は中葉の阿玉台式土器である。316は波状口縁の深鉢。口縁部は隆帯による楕円形区画内を配し、隆帯に沿って一列の角押文を施す。また隆帯下部には沈線が沿う。阿玉台I b式。317も波状口縁を呈する深鉢。波頂部から隆帯が垂下し、隆帯に沿って二列の有節線文が施され、さらに二列有節線文による楕円形区画文が施文される。阿玉台II式。318は口縁部破片で、隆帯区画と角押文が施文されている。319は平縁の深鉢、口縁部破片である。口唇部に刻目が施され、有節線文による楕円形区画内を斜行する有節線文を充填する。阿玉台I b式。320も平縁の深鉢。口縁部破片で、歯状工具による条線を山形文に施文する。321は内削状の口縁部を有し、平行沈線による弧状文を施す。322は蛇行条線文を垂下させる。阿玉台III式。323~330は同一個体と推定される。単列の角押文を施文する。

Fig.40-331~333は加曾利E3式土器である。331・332は同一個体である。平縁の深鉢で、口縁部が内湾する。口縁部は交互刺突文を巡らし、地文に単節RLを施文し、沈線による楕円形区画文外を磨消縄文とする。333はキャリバー形の深鉢。単節RLを地文とし、平行する沈線懸垂文を磨消する。

d) 後期の土器 (Fig.40-334~339)

Fig.40-334~339は加曾利B式の粗製土器である。334は口唇部下に紐線文を巡らし、縄文地文に横位の条線を施文する。335は口縁部破片で、単節RLを施文する。336~339は縄文施文の胴部破片である。

e) 晩期の土器 (Fig.40-340~349)

340は胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する広口壺で、口径17.4cmを測る。口唇部にヘラ状工具による刻目が周回し、平行沈線による方形区画文を配し、二列の沈線間にヘラ状工具による刺突状の列点文を充填する。区画内は無文となる。341は山形の小突起をもち、口縁部が外反する鉢。口縁部に縄文帯を有し、頸部にも隆帯上に縄文帯を巡らす。342・343は同一個体である。鉢の胴部破片。細隆帯による入組み文内は縄文施文。外面に赤彩が施されている。344は山形状の小突起を有し、波頂部に歯状工具による刺突文が施され、同一施文具による口縁部は横位の条線を施文する。赤彩が認められる。345は平縁の深鉢で、無文地に口唇部にかけて弧線文を施し、その下位に二条の沈線を周回させる。346・347・349は同一個体である。波状口縁の広口壺形土器。波頂部から隆帯が垂下し、口縁部は隆帯を押捺する連続浮線楕円文が周回し、頸部は一列の押しき文に直線的な沈線に縦位の区切り文を配する工字文で、胴部は捺糸文を施文する。大洞C2式新から大洞A式古期段階。348は平縁の深鉢。口縁部は沈線区画文を有し、区画内に半截竹管による平行沈線文を施文する。



Fig.40 縄文中期・後期・晩期の土器

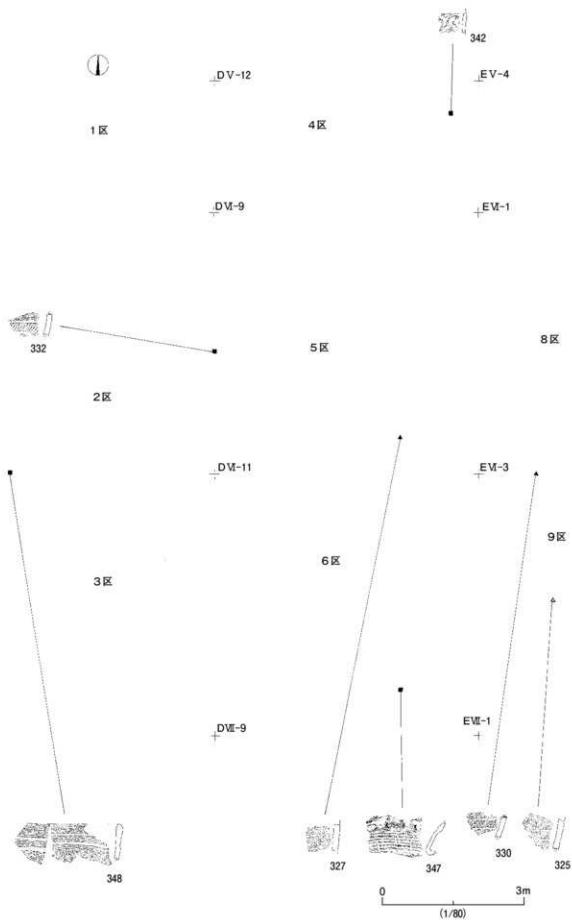


Fig. 41 縄文中～晩期出土土器分布図

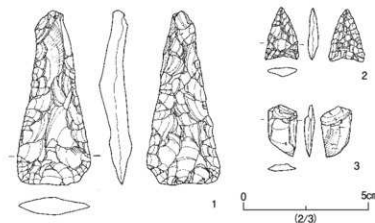


Fig. 42 縄文時代の石器

2. 石器 (Fig. 42-1~3)

1はチャート製のヘラ状石器である。完成品で大きさは長さ6.98cm、刃部幅2.87cm、基部幅1.15cm、刃部厚0.73cm、基部厚0.59cm、最大厚はほぼ中央部に位置し、0.96cmを測る。また重量は16.82gである。基部側が細く、刃部が平たく調整され、また横断面をみると表面に向かって弓状に反っている。基部右側辺の一部に自然剥離面がみられる以外、全面にわたって丁寧な調整剥離が施されている。機能的には石匙と同じである。2はチャート製の凹基部を呈する石鏃である。完成品で大きさは最大長2.05cm、最大幅1.27cm、厚さ0.37cm、重量0.94gを測る。両側縁が外側にわずかに膨らみ、基部凹部の挟りも浅い三角形鏃である。また断面は三角形状で、図表面が平坦となる。表面の調整は基部側に比較的大きな剥離痕を残すのに対し、裏面は丁寧な調整剥離を全面的に施している。3は黒曜石の剥片である。縦長剥片で打面を残していない。大きさは長さ1.85cm、幅1.18cm、厚さ0.34cm、重量0.72gを測る。いずれも表採資料であるが、少なくとも1・2については前期・浮島式期に伴うものと推定される。

(大淵淳志・小川和博)

IV. 新 林 遺 跡

第1節 調査の経緯と概要

新林遺跡の発掘調査は共同住宅建設に伴う事前事業として平成6年4月6日から開始された。本遺跡の確認調査は同日から始め、重機の搬入、トレンチ設定を実施し、表土除去作業を開始した。4月8日からは作業員による遺構検出作業を行い遺構の位置が確認できたため、4月12日から本調査に入った。この日から、遺構の精査作業に入り、並行して図面作成作業、写真撮影等を行った。発掘作業の結果としては、溝状遺構が2基、土坑が12基の合計14基を検出した。また、土坑のほとんどが陥し穴であった。時代としては近世のものとおもわれる。遺物はなにも発見することができなかった。平成6年5月9日をもって八千代市新林遺跡の発掘調査を終了している。(大淵 淳志)

第2節 遺跡の概要

新林遺跡の立地する台地は、少し離れた東側で流れる花見川に流れ込む小河川の1つによって形成された小峡谷に面する台地の1つであると考えられる。この台地の辺際より直線距離にして1,500mほど離れた地点に、今回の新林遺跡の発掘調査地点が存在する。今回の新林遺跡の調査地点は、検出された遺構等から判断して、近世以降の時期の遺跡と推定される。

検出された遺構は、同時期に伴う遺物は検出されていないが、遺構内の堆積土の観察及び、検出状況等などから考察し、近世(江戸時代)の所産の遺構と推定した。今回の新林遺跡の調査地点で確認された遺構はすべて、近世以降の時期のものと考えられ、その遺構総数は13基を数える。これらの遺構は、陥し穴状遺構8基、その他の土坑4基、溝状遺構1条を検出されている。

第3節 遺構(近世以降)

(1) 陥し穴状遺構SK01 (Fig.44, PL14)

調査区の南東側に位置し、標高26.06mの平坦部に立地する。本遺構よりも新しい時期の溝状遺構SD01に切られて確認され、南側の2/3の壁を壊された状態で検出されている。このため、遺構の正確な平面形は不明だが、南北方向に長い楕円形を呈していたと推定される。長径は推定で4.18m、短径も推定で2.80mを計ると考えられる。長軸方向も推定でN-39°-Wを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。坑底長径2.66m、坑底短径0.26m、底面中央の深さは2.50mを計測する。覆土は10層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

(2) 陥し穴状遺構SK06 (Fig.44, PL14)

調査区の南東側に位置し、標高26.06mの平坦部に立地する。本遺構よりも新しい時期の溝状遺構SD01に切られて確認され、南西側の1/6の壁を壊された状態で検出されている。このため、遺構の正確な平面形は不明だが、南北方向に長い楕円形を呈していたと推定される。長径は推定で3.37m、短径は2.14m



Fig. 43 新林遺跡遺構配置図

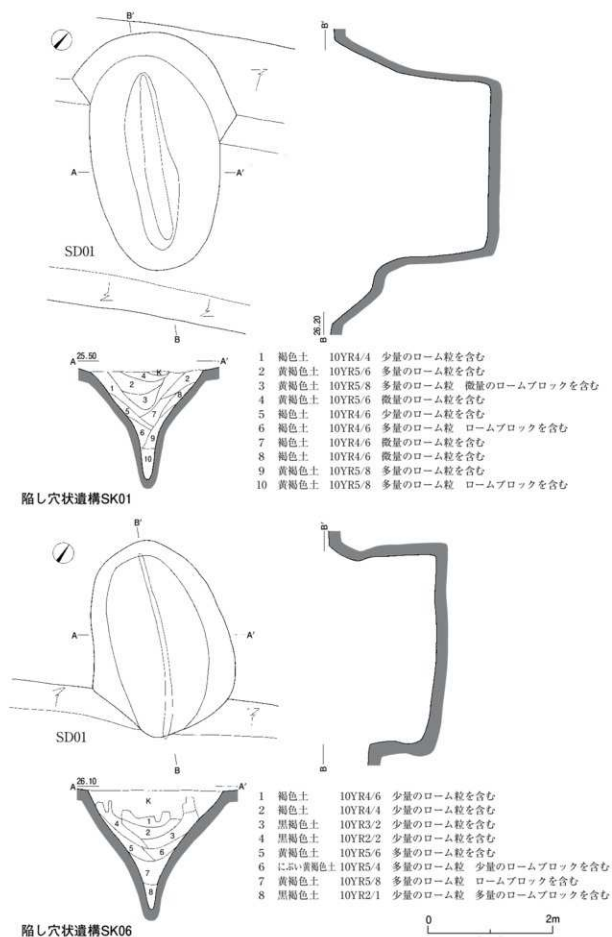


Fig.44 陥し穴状遺構 SK01・SK06

を計る。長軸方向も推定で $N-38^{\circ}-W$ を示す。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底長径2.94m、坑底短径0.08m、底面中央の深さは1.04mを計測する。覆土は8層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

(3) 陥し穴状遺構SK07 (Fig. 45, PL15)

調査区の南東側に位置し、標高26.04mの平坦部に立地する。本遺構よりも新しい時期の溝状遺構SD01に切られて確認され、南側の1/6の壁を壊された状態で検出されている。このため、遺構の正確な平面形は不明だが、南北方向に長い楕円形を呈していたと推定される。長径は推定で4.20m、短径は2.64mを計る。長軸方向は推定で $N-33^{\circ}-W$ を示す。壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底長径3.38m、坑底短径0.14m、底面中央の深さは1.58mを計測する。覆土は10層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

(4) 陥し穴状遺構SK08 (Fig. 45)

調査区の南東側に位置し、標高26.38mの平坦部に立地する。本遺構よりも新しい時期の溝状遺構SD01に切られて確認され、北側の1/3の壁を壊された状態で検出されている。このため、遺構の正確な平面形は不明だが、南北方向に長い楕円形を呈していたと推定される。長径は推定で3.30m、短径は1.82mを計る。長軸方向は推定で $N-7^{\circ}-E$ を示す。壁は比較的急に立ち上がる。底面は、北側及び南側が一段深くなって、その中間部が断面形で言えば半円形状に1段高くなっている。これは、おそらく、未完成の底面ではないかと考えられる。坑底長径0.95m、坑底短径0.18m、底面最深部の深さは1.40mを計測する。覆土は7層に分けられ、自然埋没土と考えられる。この陥し穴状遺構は底面の状態から考えて、未完成の陥し穴と考えられ、掘り上がる前に何らかの理由で廃棄したものと考えられる。これはこの遺構のみが、北側ではほぼ直線的に並ぶその他の陥し穴状遺構群とは異なる直線軸に存在していることから窺える。これはまた、本跡の陥し穴状遺構SK08が、他の陥し穴状遺構とは異なる時期に存在していたすなわち、SK08は新しい時期に掘られようとして、完成し使用される以前に廃棄された陥し穴状遺構と推定される。本址に伴う遺物は検出されていない。

(5) 陥し穴状遺構SK09 (Fig. 46)

調査区の南東側に位置し、標高25.96~26.10mの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長径4.52m、短径2.76mを計る。長軸方向は $N-33^{\circ}-W$ を示す。壁は比較的急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底長径3.70m、坑底短径0.12m、底面中央の深さは2.02mを計測する。覆土は10層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

(6) 陥し穴状遺構SK10 (Fig. 46, PL16)

調査区の南東側に位置し、標高25.96~26.06mの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長径3.24m、短径2.36mを計る。長軸方向は $N-32^{\circ}-W$ を示す。壁は比較的急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底長径2.26m、坑底短径0.18m、底面中央の深さは1.72mを計測する。覆土は7層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

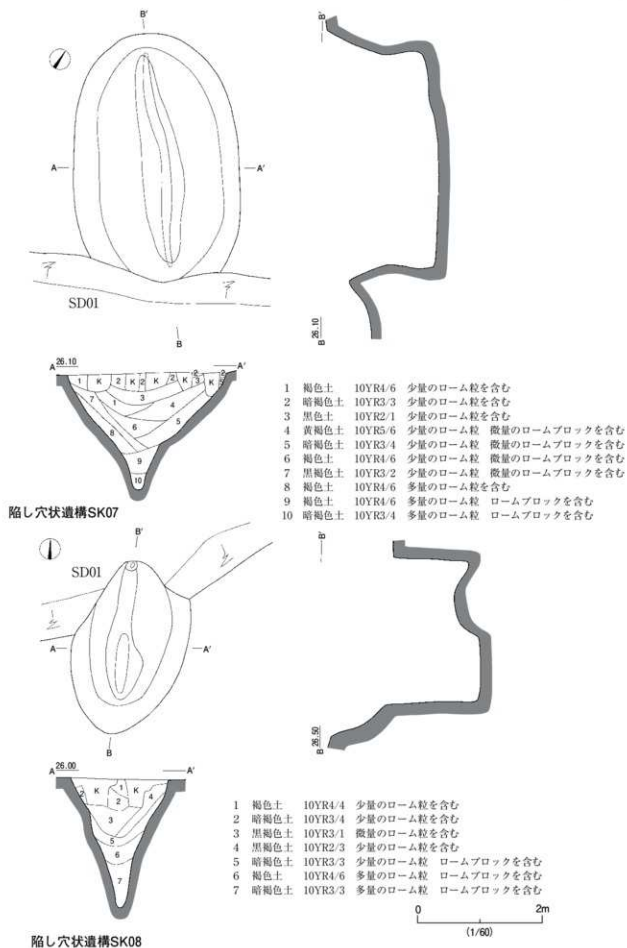
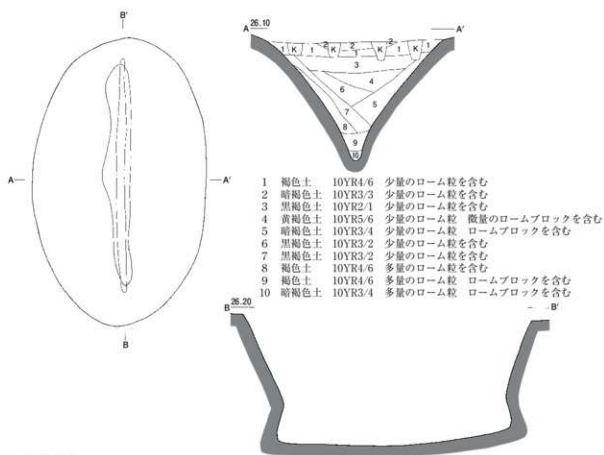
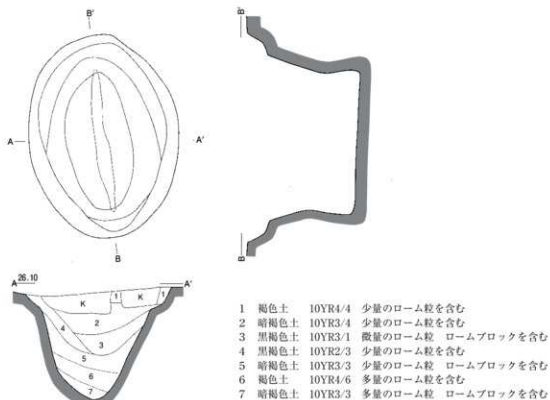


Fig.45 陥し穴状遺構 SK07・SK08



陥し穴状遺構SK09



陥し穴状遺構SK10

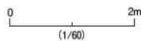
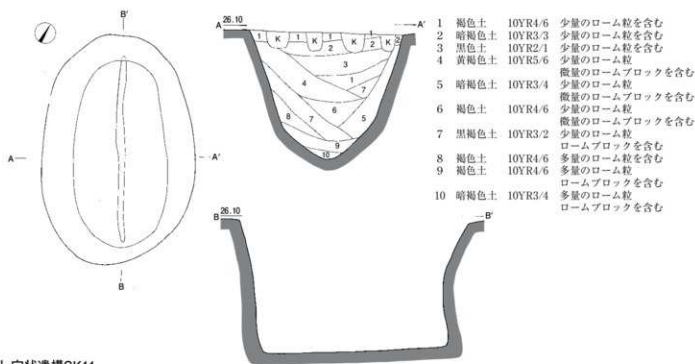
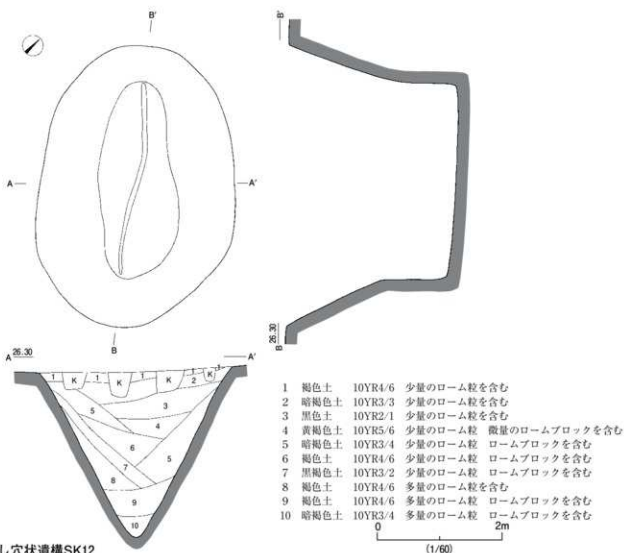


Fig.46 陥し穴状遺構 SK09・SK10



陥し穴状遺構SK11



陥し穴状遺構SK12

Fig.47 陥し穴状遺構 SK11・SK12

(7) 陥し穴状遺構SK11 (Fig. 47)

調査区の南東側に位置し、標高25.96~26.08mの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長径3.62m、短径2.44mを計る。長軸方向はN-34°-Wを示す。壁は比較的急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面の北西側先端部は坑中段部より奥へ10cm入っている。この坑底長径は2.96m、坑底短径0.12m、底面中央の深さは2.06mを計測する。覆土は10層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

(8) 陥し穴状遺構SK12 (Fig. 47, PL16)

調査区の南東側に位置し、標高26.08~26.20mの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い楕円形を呈する。長径4.44m、短径3.14mを計る。長軸方向はN-34°-Wを示す。壁は比較的急に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。坑底長径3.04m、坑底短径0.08m、底面中央の深さは2.65mを計測する。覆土は10層に分けられ、自然埋没土と考えられる。本址に伴う遺物は検出されていない。

(9) 土坑SK02

調査区の東側に位置し、標高26.20mの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い方形を呈する。長軸は160cm、短軸は120cmを計る。長軸方向はN-0°を示す。坑底の様相は未調査のため不明。覆土は確認面では黒褐色土で多量のローム粒、ロームブロックを含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。これらのことから、本土坑は近現代期の農作物の貯蔵用土坑と推定される。本址に伴う遺物は検出されていない。

(10) 土坑SK03

調査区の南東側に位置し、標高26.40mの平坦部に立地する。東側1/2以上が調査区外にあって、遺構の全容は不明だが、平面形は南北方向に長い方形を呈していると推定される。長軸は110cmを計り、短軸は不明。長軸方向は推定でN-4°-Wを示す。坑底の様相は未検出のため不明。覆土は遺構確認面では黒褐色土で多量のローム粒、ロームブロックを含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。これらのことから、本土坑は近現代期に該当する農作物の貯蔵用土坑と推定される。

本址に伴う遺物は検出されていない。

(11) 土坑SK04

調査区の南東側に位置し、標高26.00mの平坦部に立地する。平面形は南北方向に長い方形を呈する。長軸は170cm、短軸は120cmを計る。長軸方向はN-2°-Wを示す。坑底の様相は未検出のため不明。覆土は遺構確認面においては、黒褐色土で多量のローム粒、ロームブロックを含み、人為的な埋め戻し土と考えられる。これらのことから、本土坑は近現代期に該当する農作物の貯蔵用の土坑と推定される。

本址に伴う遺物は検出されていない。

(12) 土坑SK05

調査区の北側に位置し、標高25.80mの平坦部に立地する。平面形は東北方向に長い方形を呈する。長軸は140cm、短軸は110cmを計る。長軸方向はN-85°-Eを示す。坑底の様相は未検出のため不明。覆土は遺構確認面においては、黒褐色土で多量のローム粒、ロームブロックを含み、人為的な埋め戻し土と考え

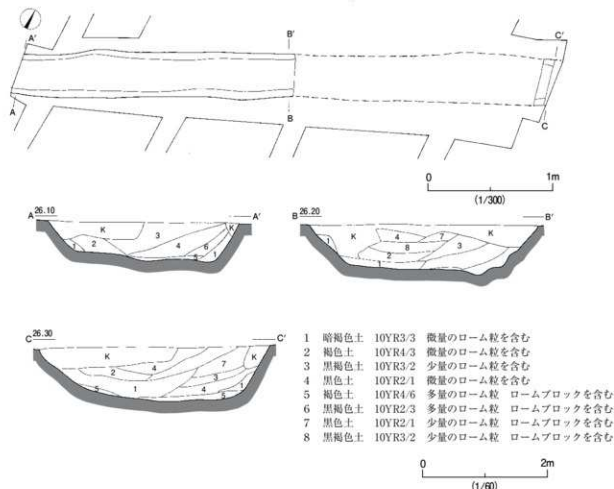


Fig.48 溝状遺構SD01（土層堆積団S = 1/60、平面図S = 1/300）

られる。これらのことから、本土坑は近現代期に該当する農作物の貯蔵用の土坑と推定される。

本址に伴う遺物は検出されていない。

溝状遺構

溝状遺構SD01（Fig.48）

調査区の北東側に位置し、標高25.98～26.22mの平坦部に立地する。北東側及び南西側が調査区域外に延びていて、また、東側の1/2が未検出のため、遺構の全容は不明だが、東西方向に直線的に延びていると推定される。走行方向は推定でN-67°-Eを示す。全長は調査区内においては42.03mを計る。遺構確認面の幅は3.10～3.60m、底面での幅は2.35～2.65mを計る。底面中央部での深さは0.62～0.84mを計測する。断面形は逆台形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや起伏を有する。覆土は8層に分けられ、自然埋没土と考えられる。また、覆土の観察から北側に土塁状の高まりがあったと推定される。なお、陥し穴状遺構SK01、06、07、08を切って存在していた。本址に伴う遺物は検出されていない。

V まとめ

第1節 二重堀遺跡

二重堀遺跡では旧石器時代および縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期の各時期の遺物が出土しており、時期を越えた生活の痕跡が長期間にわたって残されている。しかし、残念なことに各遺物に伴う遺構となると、極端に限定されるという、本遺跡のもつ特有な在り方を示している。

まず、旧石器時代の遺物が検出された。旧石器文化層を確認するため、調査区の北東部に18ヶ所の試掘グリッドを設定し、うち2グリッドから石器を複数個出す集中地点2ヶ所を確認できた。しかしいずれも出土点数は少なく、明瞭ないわゆるユニットもしくはブロックと呼ばれる石器集中地点として確認できるものではなかった。またこれらは製品もしくは使用された石器の出土はなくすべて石器製作時の剥片および破片である。ユニット2としたものが、剥片、破片3点。ユニット3としたものは同じく剥片、破片4点である。直径2mの範囲に取りまり、出土層位はソフトロームであるⅢ層下部である。また素材となる石材はチャート、安山岩、鉄石英で、接合資料はない。ただし、旧石器時代の石器として注目したいのは、表採資料である槍先形尖頭器である。チャート製で長さ7cmを測る中型の優品である。表採資料とはいえ、調査範囲が限定され、また調査区内の一部が攪乱を受けていたことにより本来の状況をとどめていないことも考慮すると単独出土と考えることができる。また素材となっているチャートは、ユニットからの出土例の剥片とは異なる母岩であることから、ここでの製作ではなく、製品そのものが外部から運び込まれた搬入品である可能性が高い。

次に縄文時代は比較的内容のあるものが検出されている。とくに出土遺物のなかで縄文土器は圧倒的な量を占めており、石器はわずかに3点のみである。縄文土器も早期から晩期まで長期間にわたるものであるが、中心となる時期は前期後半の浮島式期である。検出された遺構についても、調査当初竪穴住居跡として認識していたものであるが、住居跡としての諸条件を十分に満たしていないこと、すなわち炉の設置、床面の状況、柱穴の配列などから竪穴状遺構とし、報告の段階でSX01とした。そのほかに土坑が35基検出されている。多くは時期等を決定する重要な要素のひとつとなる遺物の出土がないものが、実に3分の1以上も占めており、わずかに1基に縄文土器の小破片が検出されただけである。まず竪穴状遺構SX01では覆土中から47点の縄文前期後半を主体とする土器が出土している。大半は床面から浮いた覆土中のものであるが、浮島式期に比定してよいであろう。また土坑はSK09、19、20、22、24、27、39、40、45、46、47で遺物が検出されており、土坑SK46を除き前期後半・浮島式期と判断した。しかし、攪乱の影響により形態の不明なものを含めても、土坑SK09以外定形的な土坑が確認できないというのもまた事実である。土坑SK09は楕円形を呈し、掘り込みもしっかりした土坑でこれを典型とすると、これに類似するものはない。他の土坑の形状はまちまちで、形の整わない不整形楕円形が多く、しかも底面が平坦ではなく、鍋底状を呈するもの、あるいは起伏を有するものなど一定していないのが特徴である。その他の時期として土坑SK46がある。覆土中から15点の縄文土器が出土しているが、1点を除き小破片のため、図示していないが、後期・加曾利B式期の浅鉢の破片が出土した。8の字状を呈する土坑で、形態的には整っていない。周辺にも当該期の遺物が出土していることから、加曾利B式の土坑もしくは竪穴状遺構としてよいであろう。なお、性格については不明である。

今回の調査で検出された遺構の多くは、必ずしも良好な状態で検出されたわけではなかったが、少なくとも旧石器時代と縄文時代全般にわたる遺物が出土していることで本遺跡の重要性が改めて再確認されたこととなった。

(大淵淳志・小川和博)

第2節 新林遺跡

遺構間の新旧関係及び時期・用途

今回調査された新林遺跡における検出された遺構の時期は、遺構の平面的な配置状況及び遺構間の新旧関係等から、次の4つの時期に分けることができると推定される。

① 第1期

新林遺跡で検出された遺構では最も古い時期と推定される。該当する遺構は、陥し穴状遺構SK01、陥し穴状遺構SK06、陥し穴状遺構SK07、陥し穴状遺構SK09、陥し穴状遺構SK10、陥し穴状遺構SK11、陥し穴状遺構SK12の7つの陥し穴状遺構である。これらの遺構は、1～4mの間隔で配置され、N-54°-Eの方向に直線的に並列されている。これら陥し穴状遺構は、遺構確認面からの深さも最深で2.50mと極めて深いことから、外部からの進入者（動物ないしは人）を防ぐためのあるいは追い込み方法の狩猟のために掘られた近世（江戸時代）期の所産の遺構とも考えられる。

② 第2期

該当する遺構は、陥し穴状遺構SK08の1基のみである。この陥し穴状遺構は底面の状況から、完成し、使用される以前に廃棄された未完成の陥し穴状遺構と推定される。近世期（江戸時代）の遺構と推定される。

③ 第3期

該当する遺構は溝状遺構SD01の1条のみである。この溝状遺構は遺構内の堆積土の観察から、平坦部という立地条件にも関わらず、北側からのより多くの土壌の流れ込みがあったことが伺える。これはこの溝状遺構の北側と並行して、土塁状の高まりがあったためではないかと推定できる。これらのことから、この溝状遺構SD01は外部からの侵入を防ぐために掘られた近世期（江戸時代）の遺構と考えられる。

④ 該当する遺構は土坑SK02、土坑SK03、土坑SK04、土坑SK05の4つの土坑である。形状及び遺構内の堆積土層等の観察から、新林遺跡においては最も新しい時期の遺構と推定される。これらの土坑は近現代に該当し、農作物を貯蔵するために掘られたいわゆる「イモアナ」と思われる。

(大淵淳志)

写 真 图 版



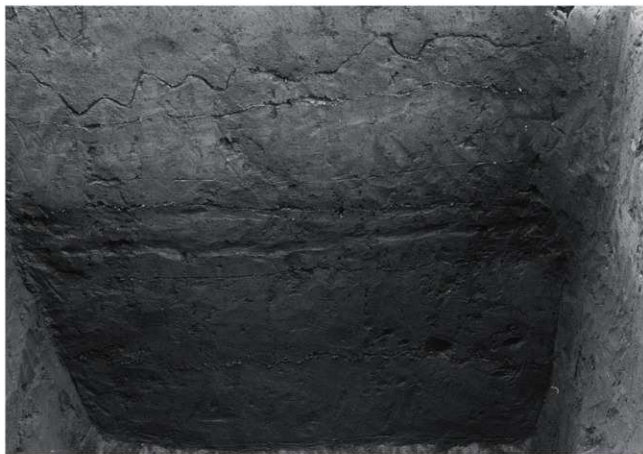
二重堀遺跡 周辺航空写真



1. 確認調査 近景



2. 確認調査 近景



1. 旧石器時代確認グリット (FV-9区 西壁)



2. 旧石器時代確認グリット (FV-3区 北壁)

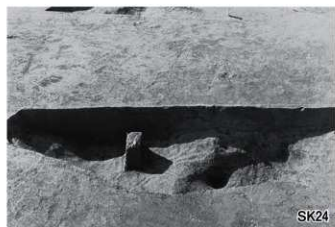


1. 調査区 土層断面 (DV-11~FⅤ-3区)



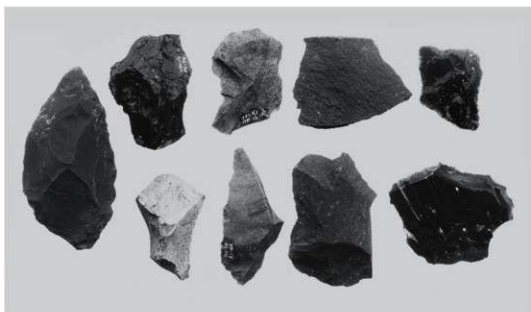
2. 竪穴状遺構 (SX01) 平面
3. 竪穴状遺構 (SX01) 細部







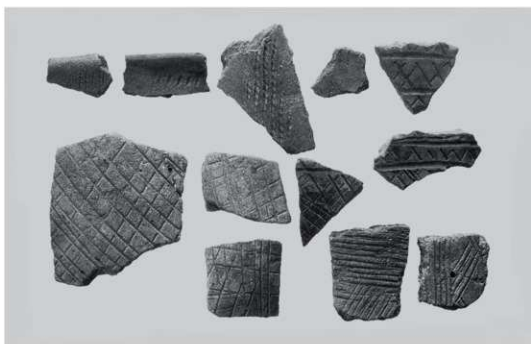




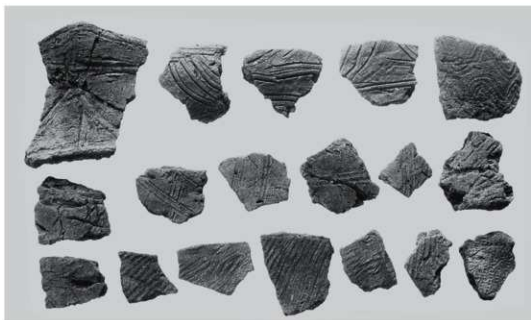
1. 旧石器時代の石器



2. 縄文時代
竪穴状遺構(SX01)
出土土器



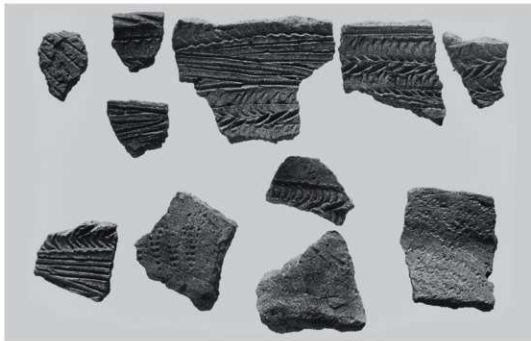
3. 縄文早期の土器



1. 縄文前期中葉の土器



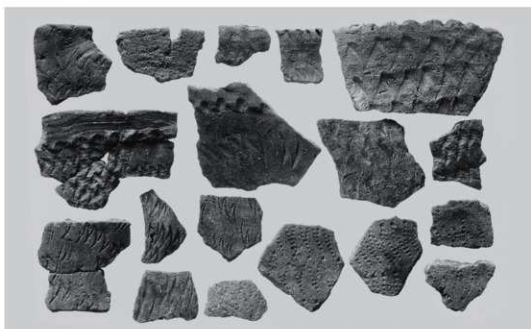
2. 縄文前期後葉の土器



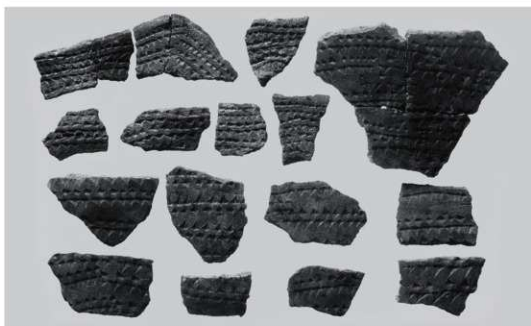
3. 縄文前期後葉の土器



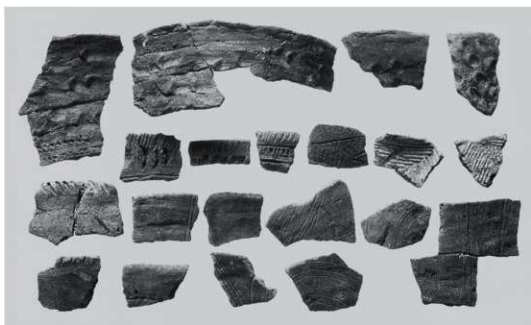
1. 縄文前期後葉の土器



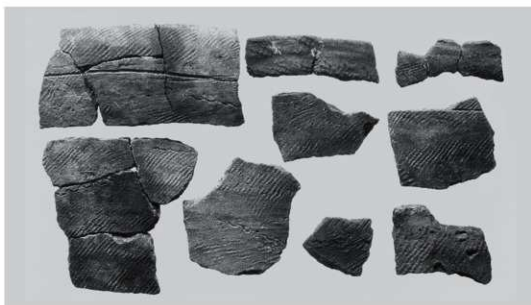
2. 縄文前期後葉の土器



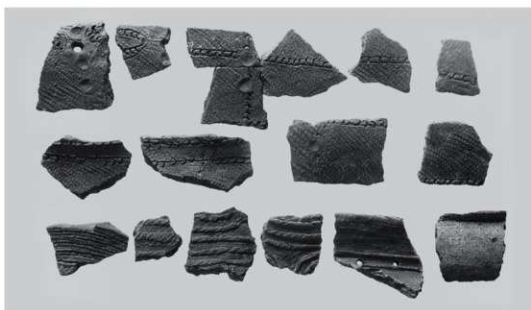
3. 縄文前期後葉の土器



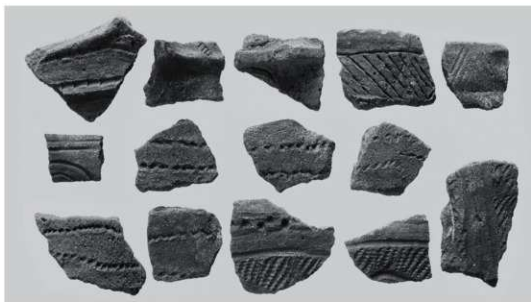
1. 縄文前期後葉の土器



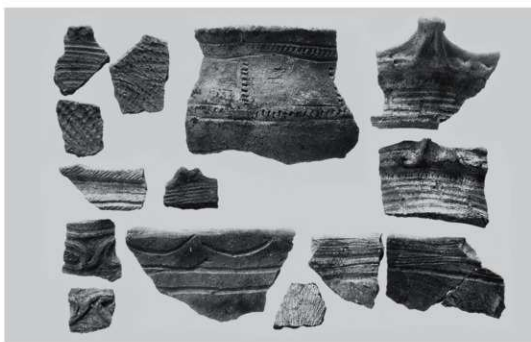
2. 縄文前期後葉の土器



3. 縄文前期後葉の土器



1. 縄文中期前半の土器



2. 縄文後期中葉・晩期後半の土器



3. 縄文時代の石斧



1. 遺跡近景



2. 陥し穴状遺構SK01



1. 陥し穴状遺構SK06



2. 陥し穴状遺構SK07



1. 陥し穴状遺構SK10



2. 陥し穴状遺構SK12

報告書抄録

ふりがな	ふたえぼりいせき・しんばやしせき		
書名	二重堀遺跡・新林遺跡		
副書名	千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書		
編著者名	小川和博・大淵淳志		
編集機関	八千代市遺跡調査会		
所在地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2	Tel 047-483-1151 内6114	
発行年月日	西暦2007(平成19年)3月31日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ふたえぼりいせき 二重堀遺跡	八千代市上高野字新 林1208-21ほか	12221	231	35° 43' 06"	140° 08' 01"	確認調査 19921207 ～ 19921225 本調査 19930423 ～ 19930917	開発面積 8,705.13㎡ 確認調査 546㎡/6,300㎡ 本調査 5,300㎡/6,300㎡	共同住宅建設
しんばやしせき 新林遺跡	八千代市上高野字稲 荷前1181-11ほか	12221	233	35° 42' 59"	140° 08' 13"	確認本調査 19940406 ～ 19940509	開発面積 5,665.77㎡ 確認本調査 5,665.77㎡/5,665.77㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ふたえぼりいせき 二重堀遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	旧石器時代 集中地点 縄文時代 竪穴状遺構 土坑	旧石器時代 剥片・碎片 槍先形尖頭器 縄文土器 早期 前半 稲荷台式土器 中葉 沈線文系土器 後葉 黒浜式土器 浮島式土器 中期 中葉 阿玉台式土器 後葉 加曾利E3式土器 加曾利B式土器 後期 大割式土器 晩期 石器 ヘラ状石器・石鏃・剥片	縄文時代前期後葉 浮島期を中心とし た土坑群
しんばやしせき 新林遺跡	陥し穴群	江戸時代	近世 江戸時代 陥し穴状遺構 溝状遺構 近現代 イモアナ	なし	近世江戸期の陥し 穴遺構群

二重堀遺跡・新林遺跡

－千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成19年3月31日 発行

編 集 八千代市二重堀・新林遺跡調査会
千葉県八千代市大和田138-2
八千代市教育委員会社会教育課内

発 行 日立造船不動産株式会社
大阪府大阪市中央区城見1丁目4番7号

印 刷 金子印刷企画
千葉県八千代市萱田410-1
